

平成29年度 文化庁

アーカイブ中核拠点形成モデル事業
プロダクト・デザイン分野

報告書

**Fiscal year 2017 Agency for Cultural Affairs
Model Project for the Development of Design Archive
Product Design Field Annual Report**

目次

ごあいさつ…………… p.3

本事業について…………… p.4

1章 ネットワークの構築

プロダクト・デザイン資料所蔵機関訪問調査…………… p.6

デザイン資料収蔵機関ダイレクトリ…………… p.10

2章 アーカイブ手法の検討

プロダクト・デザイン修復研究会…………… p.14

デザインミュージアム コレクションプラン…………… p.31

3章 データベースの管理、運用、利活用

公開講座「座って学ぶ椅子学講座2」…………… p.38

プロダクト・デザイン関連展データベース構築…………… p.41

所蔵機関横断データベース(プロトタイプ)の構築と拡充…………… p.48

4章 成果報告

三校合同活動成果報告会…………… p.58

本事業 web サイト…………… p.60

ごあいさつ

武蔵野美術大学 美術館・図書館は、平成27年度より29年度までの3年間、文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」に取り組んでまいりました。

これは日本国内におけるデザイン資料の所蔵状況を調査すると共に、所蔵機関間のネットワーク構築、また資料のデジタル・アーカイブ手法の研究等を通じて、貴重なデザイン資料の保存・修復・利活用方法を探っていくことを目的とし、以下の3大学により展開されたものです。

文化学園大学和装文化研究所(ファッション・デザイン分野)、京都工芸繊維大学美術工芸資料館(グラフィック・デザイン分野)および武蔵野美術大学美術館・図書館(プロダクト・デザイン分野)と、それぞれの特色を生かした調査・研究を進めてきました。

2018年1月20日にはシンポジウム「日本のデザイン資源を考えるー文化庁アーカイブ中核拠点形成モデル事業報告ー」を開催し、この3年間の活動報告を行いました。当日の内容をまとめた

報告冊子も、お手元に届くことと思います。

当冊子は、昨年に引き続き行われた訪問調査に加え、アーカイブ手法の一例として実施された各種講座や今後のプロダクト・デザイン収集の基礎資料例等、平成29年度の活動内容を報告するものです。

当事業は平成29年度をもって終了となりますが、3年間で得られた機関間のネットワークを通じて、今後もデザイン資料とそのデジタル・アーカイブ化について、調査・研究を続ける必要性を強く感じているところです。

最後になりましたが、多忙な日常業務の中、本事業にご協力いただいた各機関のみなさまに、心より御礼申し上げます。

2018年3月

武蔵野美術大学 美術館・図書館
館長 赤塚祐二

本事業について

「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」は、文化関係資料のアーカイブ化推進において中核となり得る大学や所蔵館・機関等を国（文化庁）が拠点として委託し、一定期間集中的に取り組を進めることにより、当該拠点を中心としてアーカイブの整備を効率的かつ効果的に促進することを目的としている。

当該事業実施の背景としては、文化庁において進められてきた「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」事業があげられる。これは歴史的・文化的価値のある我が国の貴重な文化関係資料が散逸・消失することのないよう、アーカイブの構築に向けた資料の保存及び活用を図るための望ましい仕組みの在り方について調査研究を行うもので、平成26年度に行われた有識者会議※1において、具体的な方策が検討・提案され、平成27年度（2015年）より平成29年度（2017年）まで当該事業が実施された。

具体的にはデザイン分野をグラフィック、ファッション、プロダ

クトの3分野に分け、各分野の「中核拠点」となる3団体を選定し、①ネットワークの構築 ②アーカイブ手法の検討 ③データベースの管理・運用・利活用を調査研究の必須課題とし、各分野の現状調査・分析の後、デザイン分野全体での問題点の共有と解決策の提案を目指すこととなった。

3分野のうち、プロダクト・デザインに関わる資料のアーカイブ化推進および国内の諸アーカイブのネットワーク化の拠点を、武蔵野美術大学美術館・図書館に設置し、資料の収集、整理、保管、保存修復、利活用の手法の検討と構築を行うこととし、平成27年度から平成29年度まで事業を推進してきた。

参考資料

※1文化関係資料のアーカイブに関する有識者会議中間とりまとめ（平成26年8月27日）
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunka_archive/pdf/torimatome.pdf

1 章

ネットワークの構築

Section 1. Creation of a Network

プロダクト・デザイン資料所蔵機関訪問調査

デザイン資料収蔵機関ダイレクトリ

プロダクト・デザイン分野の資料に関する情報収集及び所蔵館のネットワーク構築を目的として、国内外の諸機関における資料の収集・保存・管理・利活用、そして資料のデジタル・アーカイブ化などの現状について、国内10機関、海外2機関、計12機関への訪問調査を行った。前年度に引き続き、現状調査に加えて、データベース公開や所蔵館ネットワーク構築等について各機関のご意見もうかがった。

1 台北市立美術館(台湾)

日時： 平成29年4月23日(日) 10:00~12:00

場所： 台北市立美術館

出席者：蕭淑惠(解説員)、
上野敬子、沢田雄一、鳥越麻由(武蔵野美術大学)、
杉浦藍、林保旭(通訳)



2 財団法人台湾デザインセンター／台湾デザインミュージアム(台湾)

日時： 平成29年4月23日(日) 14:00~16:00

場所： 台湾デザインセンター／台湾デザインミュージアム

出席者：楊玉婷(台湾デザインミュージアムオペレーションセクション ディレクター)、崔慈芳(台湾デザインセンター 日本業務代表・シニアマネージャー)、
上野敬子、沢田雄一、鳥越麻由(武蔵野美術大学)、
杉浦藍(通訳)



3 豊田市美術館

日時： 平成29年6月8日(木) 14:00~15:00

場所： 豊田市美術館

出席者：千葉真智子(学芸員)
沢田雄一、北澤智豊、西村碧(武蔵野美術大学)、
内田剛史、村松真理子((株)ミュージアムメディア研究所)



4 姫路市立美術館

日時： 平成29年7月4日(火) 11:00~13:00

場所： 姫路市立美術館

出席者：不動美里(副館長)、松田伸治(総務課長)、
安部すみれ(学芸員)、
石崎佳菜子(学芸員)、谷口依子(学芸員)、
平出哲朗、本岡耕平(武蔵野美術大学)、
内田剛史、村松真理子((株)ミュージアムメディア研究所)



5 国立近現代建築資料館

日時： 平成29年8月3日(火) 10:00~11:00

場所： 国立近現代建築資料館

出席者：藤本貴子(文化庁 長官官房政策課 国立近現代建築資料館)、高木愛子(文化庁 長官官房政策課 国立近現代建築資料館 建築資料調査官)、
照山貴子、岡達也(京都工芸繊維大学)、
金井光代、中村弥生(文化学園大学)、
上野敬子(武蔵野美術大学)

6 横浜市民ギャラリーあざみ野

日時： 平成29年10月27日(火) 14:00~15:00

場所： 横浜市民ギャラリーあざみ野

出席者：森井健太郎(館長)、日比谷安希子(学芸員)、
沢田雄一(武蔵野美術大学)、
内田剛史、堀田敦士((株)ミュージアムメディア研究所)

7 富山県美術館

日時： 平成29年11月5日(日) 13:00~14:20

場所： 富山県美術館

出席者：稲塚展子(学芸課係長 学芸員)、
赤塚祐二(武蔵野美術大学美術館・図書館館長)、
上野敬子、平出哲朗、北澤智豊(武蔵野美術大学)



8 岐阜県現代陶芸美術館

日時： 平成29年11月14日(火) 10:30~12:00

場所： 岐阜県現代陶芸美術館

出席者：高橋秀治(館長)、花井素子(学芸員)、
林いづみ(学芸員)、
沢田雄一(武蔵野美術大学)、
内田剛史((株)ミュージアムメディア研究所)



9 多治見市モザイクタイルミュージアム

日時： 平成29年11月14日(火) 12:30~14:00

場所： 多治見市モザイクタイルミュージアム

出席者：村山閑(学芸員)、
沢田雄一(武蔵野美術大学)、
内田剛史((株)ミュージアムメディア研究所)



10 浜松市楽器博物館

日時： 平成29年11月14日(火) 16:30~18:00

場所： 浜松市楽器博物館

出席者：嶋和彦(館長)、梅田徹(学芸係長)、
沢田雄一(武蔵野美術大学)、
内田剛史((株)ミュージアムメディア研究所)

11 九州産業大学美術館

日時： 平成29年12月1日(金) 14:00~15:30

場所： 九州産業大学美術館

出席者：中込潤(学芸室長)、小栗栖まり子(学芸員)、
沢田雄一、宮本正哉(武蔵野美術大学)、
内田剛史((株)ミュージアムメディア研究所)

12 大阪新美術館建設準備室

日時： 平成29年12月26日(金) 13:30~15:30

場所： 大阪新美術館建設準備室

出席者：植木啓子(主任学芸員)、松山ひとみ(学芸員)、
岡達也(京都工芸繊維大学)、
沢田雄一(武蔵野美術大学)、
内田剛史((株)ミュージアムメディア研究所)

●プロダクト・デザイン資料所蔵機関訪問調査 平成27年度~29年度 3ヵ年訪問機関リスト

[平成27年度]	
東京国立近代美術館工芸館	平成28年2月9日
富山県立近代美術館	平成28年2月12日
宇都宮美術館	平成28年2月19日
大阪新美術館建設準備室	平成28年2月26日
京都市立芸術大学芸術資料館	平成28年2月29日
ヴィクトリア&アルバートミュージアム(英国)	平成28年3月10日
デザイン・ミュージアム(英国)	平成28年3月11日
ロンドン科学博物館(英国)	平成28年3月11日
ジェフリー・ミュージアム(英国)	平成28年3月12日

[平成28年度]	
Paju Typography Institute(韓国)	平成28年6月16日
東大門デザインプラザ[DDP](韓国)	平成28年6月16日
柳宗理記念デザイン研究所	平成28年12月7日
神戸ファッション美術館	平成28年12月20日
横尾忠則現代美術館	平成28年12月21日
福岡市博物館	平成29年1月19日
九州産業大学美術館	平成29年1月19日
M Plus Museum(香港)	平成29年1月26日
慶應義塾大学アート・センター	平成29年2月7日
多治見市モザイクタイルミュージアム	平成29年2月24日
岐阜県現代陶芸美術館	平成29年2月24日
明星大学デザイン学部デザイン学科	平成29年3月1日
くにたち郷土文化館	平成29年3月3日
東京造形大学美術館	平成29年3月3日

[平成29年度]	
台北市立美術館(台湾)	平成29年4月23日
台湾デザインセンター/台湾デザインミュージアム(台湾)	平成29年4月23日
豊田市美術館	平成29年6月8日
姫路市立美術館	平成29年7月4日
国立近現代建築資料館	平成29年8月3日
横浜市民ギャラリーあざみ野	平成29年10月27日
富山県美術館	平成29年11月5日
岐阜県現代陶芸美術館	平成29年11月14日
多治見市モザイクタイルミュージアム	平成29年11月14日
浜松市楽器博物館	平成29年11月14日
九州産業大学美術館	平成29年12月1日
大阪新美術館建設準備室	平成29年12月26日

本事業は、アーカイブの拠点形成を形成することを目指している。デザインに関する各分野の拠点機関は「国内のどの機関がデザイン資料や関連情報を有しているか」という情報を集約することも重要な使命である。

そこで本事業における訪問調査及びアンケート調査によって、国内の美術館、博物館等の機関が所蔵するデザイン資料の所在を「デザイン資料収蔵機関ダイレクトリ」(<http://www.d-archive.jp/institutions-search>)として地図上に視覚化する

ることを試みた。

ダイレクトリは本事業ウェブサイト上にて公開しており、プロダクト・デザイン、ファッション・デザイン、グラフィック・デザインの三分野合同で構築し、資料の種別、年代、制作地域から絞り込み検索をすることができる。

検索結果画面に表示される機関名は、それぞれの「公式HP」とリンクされており、本ダイレクトリ利用者をより詳細な公式情報へと導く構成となっている。



検索結果

東京都	G F P	東京家政大学博物館 Tokyo Kasei University Museum	公式HP
石川県	G F P	伊藤忠記念デザイン研究所 Itoyoshi Iden Design Memorial	公式HP
富山県	G F P	富山県美術館 Toyama Prefectural Museum of Art and Design	公式HP
東京都	G F P	武蔵野美術大学 美術館・図書館 Musashino Art University Museum & Library	資料DB 公式HP
京都府	G F P	京セラ工業株式会社 京セラ美術館 Kyocera Institute of Technology Museum and Archives	公式HP
福岡県	G F P	田川法美術館 Tagawa Museum of Art	公式HP
兵庫県	G F P	神戸映画資料館 Kobe FLAVET FILM ARCHIVE	公式HP
東京都	G F P	丸井株式会社 Marubeni Corporation	公式HP
東京都	G F P	公益財団法人くがたち文化・スポーツ振興財団くがたち郷土文化館 Kugatachi City Historical Museum	公式HP
岐阜県	G F P	多治野市モザイクタイムミュージアム MOSAIC TIME MUSEUM, Toyou	資料DB 公式HP
福岡県	G F P	九州産業大学美術館 Museum of Kyushu Sangyo University	資料DB 公式HP
北海道	G F P	北海道立帯広美術館 Hokkaido Oshima Museum of Art	公式HP
福岡県	G F P	福岡アジア美術館 FUKUOKA Asian ART Museum	公式HP
神奈川県	G F P	相模原市立博物館 SAGAMIHARA CITY MUSEUM	公式HP
愛知県	G F P	刈谷市美術館 KANAYA CITY ART MUSEUM	公式HP
大阪府	G F P	公益財団法人 豊島文化財団 刺繍文庫 Tadapuriko Library	公式HP
福岡県	G F P	CCGA現代グラフィックアートセンター Center for Contemporary Graphic Art [CCGA], DNF Foundation for Cultural Promotion	公式HP
福岡県	G F P	福岡市立歴史博物館 Fukuoka City History Museum	公式HP
兵庫県	G F P	神戸ファッション美術館 Kobe Fashion Museum	公式HP
長野県	G F P	尾張守コレクション 酒造クラシック美術館 Suzuka Classic Museum	公式HP
京都府	G F P	公益財団法人 京博服飾文化研究財団 (KCI) The Kyoto Costume Institute	公式HP
東京都	G F P	文化学園服飾博物館 Bunka Gakuen Costume Museum	公式HP
石川県	G F P	金沢伝統美術館 Kanazawa Non Museum	公式HP
東京都	G F P	国立女子大学博物館 Kyoritsu Women's University Museum	公式HP

2章

アーカイブ手法の検討

Section2. Studying Archiving Methods

プロダクト・デザイン修復研究会

デザインミュージアム コレクションプラン

本事業の一環として平成28年度より公開講座「座って学ぶ 椅子学講座」(→3章)を開催しているが、その際、当館椅子コレクションの一部に経年劣化や破損が見受けられたことから、本コレクションの収集開始以来、初めて本格的な修復を実施した。

修復にあたり助言を賜った本学名誉教授の島崎信氏と実際に修復をおこなった北欧家具修理 Sitwellの濱田伸行氏の御二人を講師に招き、「デザイン資料の保存修復に関する考え方について」と題し、講演会を開催した。当館コレクション修復事例の紹介を通して、本事業の目的の一つである、デザイン資料の保管から利活用の方までを視野に入れた保存修復のあり方について考える機会となった。

内容：

1.デザイン資料の保存修復に関する考え方について

2.修復に関するケーススタディ



A:《チェスカ(B64)》
マルセル・プロイヤー
【症状】籐座の破れ



B:《モーダス》
クリスチャン・ヴェデル
【症状】皮革・内部素材の劣化



C:《JH-703》
ハンス・ウェグナー
【症状】木部・内部素材の劣化

講演会
「デザイン資料の保存修復に関する考え方について」

日時：平成29年10月4日(水) 16:00 - 17:30

会場：武蔵野美術大学美術館 美術館ホール

講師：島崎信(武蔵野美術大学名誉教授)

濱田伸行(北欧家具修理 Sitwell)

来場者数：15名

修復前の調査・検討項目

- i. <症状調査、要修復箇所の確認>
- 症状と原因の調査・確認
- ii. <材料・素材の調査>
- 修復可能な材料・素材が用いられているか
- iii. <加工技術・時代背景の調査>
- デザイナーの設計意図や好み、職人の加工・仕上げに関する調査
- iv. <収集された基準の確認>
- どのような価値基準で収集された資料か
- v. <修復可能な範囲と条件に関する調査>
- 販売元や製造元が現存するか
- 販売元や製造元が修理を受け付けているか
- アフターサポートの対象か
- 修復に使用する材料・素材は入手可能か
- 当時と同じ加工技術(設備や人材)が利用可能か

なお、本講演会の様子は「座って学ぶ椅子学講座2—ムサビ近代椅子コレクション400脚」記録集のp.85~p.101に掲載された。以下に同記事を再録することで、本講演会の報告としたい。



デザイン資料の 保存修復について

1967年の開館以来、武蔵野美術大学美術館のコレクションとして400脚を超える椅子が収集されてきました。昨年度(2016年)の「座って学ぶ 椅子学講座」をきっかけにコレクションを総点検したところ、傷みが目立つものが数多く見付き、それを受けて「北欧家具修理 Sitwell」の濱田伸行氏に19脚の修理を依頼しました。

そこで、「座って学ぶ 椅子学講座2」の特別編として、修復にあられた濱田氏をお招きし、デザイン資料の保存修復のあり方について話を伺いました。

デザイン資料の保存修復について

はじめに ― 受け継いで使っていく

島崎 | 椅子学講座を始めるにあたって所蔵品を確認したところ、「こんなになっちゃっているのか」という椅子がたくさん出てきました。壊れたり素材が劣化したりと、トラブルの内容は様々でした。美術館としては、これらの修復に取り組んでいかなければなりません。私の学んだ東京藝術大学には、絵画や彫刻の修復が学べるコースがあります。そこには世界中の美術作品修復のノウハウが集まり、基本的なルールも確立しています。しかし残念なことに、近代プロダクトの修復のセオリーは、まだ確立されていません。今回の修復に際しては、手探りの部分がありながらも、きちっとした手順を踏んでいきたいと思っていました。

と言いますのも、私がかつて仕事をしていた北欧のデンマークでは、椅子は親から子に、子から孫に、さらにそれ以上の代を重ねて使い続けていくのが基本です。デンマークに限らず、ヨーロッパは今でもそうですね。

ところが日本の場合、一般家庭に椅子が入ってきたのは戦後のことで、量産を背景に、新製品を買い、壊れたり飽きたら捨てるという、悪い意味でのマスプロダクションの文化に椅子も組み込まれています。しかし考えてみると、戦前の日本での生活の道具は、壊れれば何度でも直し、大事に受け継いで使っていくのが当たり前でした。

私は、愛着のあるものに囲まれて暮らすのが本当の豊かな生活であり、だからこそ、使い続けていく文化をもっと広めたいと思ってきました。

家具を長い間使っていくと、当然のこととして、経年による材料の劣化が起こります。それから構造的な不具合も出てきます。その部分を、使用に耐えられるように、きちっと直す。これは基本的には復元の技術です。しかし、同じデザインでも生産年が今から60年前、40年前、20年前とでは、仕上げ方法や加工が変わってきます。

接着剤を例にとっても、1930年頃の接着剤といえば、膠が牛乳から採れるカゼインでした。それが1940年代になってから高分子化合物によるプラスチック系の接着剤が誕生します。張り生地にしても、昔はすべて、ウール、木綿、麻、皮革などの天然素材でした。それが摩擦に強い化繊の素材の混紡や、ビニル系の生地など、新しい素材が登場しました。

生地の張り方ひとつにしても、デザイナー皆同じではなく、フィン・ユール(1912-1989)^{註1)}のデザインマインドによる張り方と、アーティフォート社(Artifort)のピエール・ポラン(1927-2009)の張り方とは、まったく違う。ムサビの椅子の修理は、そういうことがわかる人をお願いをしたかった。^{はまだのぶゆき}濱田伸行さんはまさしく適任だったわけです。濱田さん自身、家具の木部の修理や張りもできる技術を持っておられます。その専門家の目をもって、椅子のデザイナーとメーカーの特徴から、どの職人に依頼したらいいかを判断し、手配していただきました。張りひとつにも、それなりの特徴があるのです。濱田さんはカール・ハンセン&サン社に勤め、その後さらに私が校長を務めるダニエル社併設の「家具の学校」に学びました。在学中、これまた私が携わっている「家具の病院」にも来ていただき、ムサビ所蔵のアドルフ・ロース(1870-1933)^{註2)}の家具類を学内で移設するときにも大変お世話になりました。そういうご縁から、今回お願いをしました。

革椅子の修復 ― 張り生地とクッション

島崎 | ここから修復した椅子を濱田さんと1脚ずつ説明していきます。濱田さんに中心になってお話をさせていただき、私が質問するかたちで、進めさせていただければと思います。

では、最初はコンフォート社(Comfort)^{註3)}から。《エルダ(イージーチェア)》^[R.01]という椅子で、とてつもなく大きく、重い。濱田さんに見ていただいた最初はすごく汚かったね。濱田 | ジョエ・コロombo(1930-1971)の1960年代の終わりぐらいの製品でしょうか。革は上質の、おそらくセミアニリン^{註4)}を使っています。皆さんに相当人気があったようで、座った跡がすごい(笑)。無数の傷がついています。中は恐らくフォームラバーで、劣化が進み、一部は粉状になってしまっています。ただそれはフォームを崩すようなダメージではなく、手を置くところとか、頭を支えるところなどが、ちょっと粉状になっている具合です。そこに関しては目をつぶりまして、とにかく表面の傷を直していこうと取り組みました。

通常でしたら、補修に使う革用のクリームを塗って補修していったと思うのですが、ナノ単位の粒子で素材の内部に色を定着させるスプレーが市販されていて、それを全体的に塗って修復を行いました。これだと上から色を塗るというよりも、この革をまた染め直したような効果があり、傷や褪色はかなり復活している状態です。

島崎 | この椅子の中材は天然素材じゃないですね。ウレタンやフォームラバーは、何年もしないうちにグズグズになったりします。

あるとき、世界的なプラスチックの専門家が講義をするというのでフィンランド大使館から招かれて、歓迎の夕食会でたまたまその専門家の隣に座ったので、私は発泡ウレタンあるいはフォームラバーがすぐ劣化して粉になってしまうと言ったら、「確実に保つのは30年でしょう」と言われました。

濱田 | フォームラバーの場合は、表面が砂状になってまるで砕けたビスケットのようでした。

島崎 | 天然素材の場合は修復に関するかつてのノウハウがあります。それと比べると、つくづく私は、プラスチック文化の限界を感じます。今後、経年変化を見たくてもできないんじゃないかと危惧しています。

濱田 | 次は、《PK27(イージーチェア)》^[R.02]。コル・クリステンセン社(E.Kold Christensen)^{註5)}が昔作っていて、今は製造されていない椅子です。デザイナーはポール・ケアホルム。上質な革がシートカバーに使われていますが、座面に恐らくコーヒーカーナにかをこぼした跡が見受けられ、染みが目立っていました。新しい革で作直すと、だいぶ雰囲気が変わってしまうだろうという判断で、調合したクリームを少しずつ塗り重ねて、だんだん目立たなくさせ



R_01

エルダ(イージーチェア)
Eida (Easy Chair)

ジョエ・コロombo(1930-1971)

Joe Colombo

コンフォート(イタリア)

FRP(繊維強化プラスチック)、革張り

回転式

不明(1965年)

北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行

皮革の傷部分、褪色の復元



染めQ(染色型塗料)にて褪色した革を塗装。ナノ単位の粒子が素材の内部まで浸透して密着するため、染めたような仕上がりになる

R_02

PK27(イージーチェア)

PK27 (Easy Chair)

ポール・ケアホルム(1929-1980)

Poul Kjærholm

E.K.クリステンセン(デンマーク)

メイプル、革張り/成型合板

不明(1972年)

北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行

劣化皮革の修復とボタンの再現



5 | 1950年代、デンマークの5つの量産家具メーカーで組織されたウェグナー家具の販売会社・サレスコ社のトップであったアイヴィン・コル・クリステンセンが設立した会社。デザインに精通し敏腕エージェントだったコルは、フリーに転身した後、ポール・ケアホルムのデザインを起用するためにハンス・ウェグナーとサレスコ社から別離した。PKコレクションの多くはケアホルム没後の1982年にフリッツ・ハンセン社へ売却された。

6 | ココナッツ・ファイバーと呼ばれる、椰子の外皮から採れる繊維をゴムなどで固めたクッション材。

7 | オーレ・ワンシャやモーゲンス・ラッセンといった一流デザイナーの家具制作を請け負っていたデンマークの家具工房。マホガニーやローズウッドなどの高級材を使い、確かな木工技術に裏打ちされたクラシックスタイルの家具を多く残している。



R_03

OW アームチェア (アームチェア)
OW Arm Chair (Arm Chair)

オーレ・ワンシャ (1903-1985)
Ole Wanscher

A.J.イヴァーセン (デンマーク)
ローズウッド、革張り
不明 (不詳)
ダニエル社併設「家具の病院」 吉田昌義
背・座の張り替え

8 | オーレ・ワンシャの代表作のひとつとして知られる椅子。“コロニアル”は“植民地の”という意で、1600年代から1700年代にかけて列強の植民地となった土地に見られる建築などの様式を指す。

9 | 薄い平織り綿布。下張り材や底張り材として用いられる。

10 | パイピングのこと。布や革といった、きれいの端の代(しろ)をほつれないよう、別生地で作るんだり間に挟み込んだりして見た目よく始末する方法で、別生地をアクセントにして装飾的に用いることも多い。

11 | 1930年代初めに創業したデンマークの家具メーカー。質の高い家具制作で知られ、キントラーセン夫妻がデザインした家具を数多く手がけたが、1960年代の終わりに幕を閉じた。

ました。

島崎 | 革のシートは合板の上にただ置いてあるだけ。シートの後ろに何にも留めはなかったのですね。クッション材は椰子の繊維をゴムで固めたパームロック^{註6)}でした。

濱田 | そうですね。昔からこれはクッション材に使われていました。置いてあるだけです。摩擦で滑らない。素材の特性がよく考えられています。

様々な椅子の張り方

濱田 | 次がA.J.イヴァーセン工房 (A.J.Iversen)^{註7)}のオーレ・ワンシャ (1903-1985) の《OW アームチェア (アームチェア)》^[R_03]です。こちらは制作が40年代ぐらいでしょう。



① | 座は麻のウェビングテープの上に麻布が張られ、その上に馬毛と綿が敷かれており、張り替えの際に綿を補充した



② | 玉縁は革に縫い付けてあるのではなく釘で留めて折り返されていた。背の一部は手縫いが施されている

郭を際立たせています。座面にまわしてある玉縁は革に縫い付けてありますが、背の玉縁は釘で木枠に留められていました。

1940年代終わり頃のデンマークでは、張り家具は高嶺の花だったそうで、合板とか木を使った椅子が多かったようです。クッション材にこういった馬毛や白綿を使っていることから、戦後に作られたものではなさそうですね。

島崎 | ワンシャがデザインしたものならば戦前ですね。1941年頃でしょう。背の玉縁のシルエットがいい。

濱田 | そうですね。現代の方法ならウレタンを重ねてフォームを出していくと思うのですが、これに関しては綿を中心にしています。パンパンに詰めすぎず、職人さんの感覚で収めていただいて、この上品なシルエットができています。

島崎 | 次の《ファイヤープレイスチェア (イージーチェア)》^[R_04]も古い椅子です。アームと一体の木枠に背座が載っているタイプ。修理作業は、I.S.U. houseの上柳さんにお願いしました。グスタフ・ペーテルセン社^{註11)}製の椅子です。木部がだいぶ傷んで、革も劣化していました。

濱田 | 恐らく最初に張っていたのはヌメ革です。それが乾燥して切れていた状態です。中



① | 本体の詰め物として、背裏より黒綿、ファイバー、ヘッシュン。木部のへこみに燃りのない植物系詰め物、ヘッシュン、馬毛、黒綿、金巾が使われている



③ | 玉縁を打ち、背表を手縫いで仕上げて、ボタンを締める

② | 腰の辺りにくる襷が意匠のように取られている

の詰め物は綿と馬毛でしたので、空気を含ませ、あらためて弾力をもたせて詰め直してもらいました。例えば詰め物がウレタンですと、グズグズになってしまうんですけど、天然素材に関しては再利用が可能です。

島崎 | クラシックな家具を多く手がけている上柳さんならではの。「面倒な再利用なんてやめてウレタンでいきましょう」と言わないところがいい。

濱田 | まず内部の木枠の中に、燃りのない植物系の詰め物が入っており、背裏側にはヘッシュン^{註12)}、ファイバー、黒綿、背表と座面にはヘッシュン、馬毛、黒綿が載せてあり金巾で下張りされていました。造りがオーレ・ワンシャの《OW アームチェア》^[R_03]と一緒に、このフォルムを出すための玉縁です。すべて釘で留まっています。

島崎 | 椅子の内部を観察すると、伝統的な素材はもちろん、修復の歴史とか文化がわかりますね。

濱田 | そうですね。職人さんとも、釘一つ取ってもこれはどこの国の釘で、いつぐらいの年代かなと話しながら作業していました。

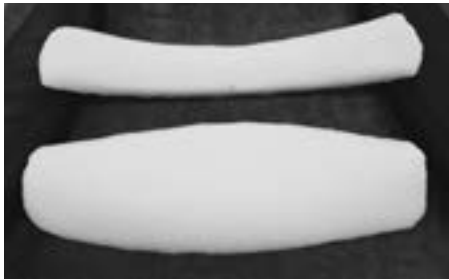
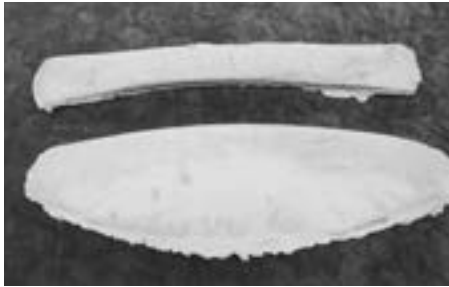
張り生地は名古屋の川善で作っている椅子張りの革を使いました。この革はセミアニリン仕上げです。日本では椅子用の革を作っているメーカーがあまりなく、川善は貴重な存在です。

もどどおりのヌメ革を張るのも手でしたが、ムサビでは学生さんが座る機会も多いので、若干耐久性があるセミアニリンを選びました。

背表と玉縁は手縫いで縫合されています。この距離を縫うのが結構大変でして、革は布に比べて硬いうえに、針穴が開いてしまうため失敗できません。職人さんも何日か練習してから作業されていました。

島崎 | 次はガラッと変わって、《モーダス (イージーチェア)》^[R_05]。クリスチャン・ヴェデル (1923-2003) の作品です。

濱田 | 座面に大きくとられた襷が特徴で、この襷が座ったときに大きく開き、柔らかなクッションとともに包み込むような快適さを生み出す機能性をもっています。これがまた、中身のフォームラバーがほとんど砂状になっていました。そこをフォローするかたちで、上からウレタンを張って、フォームを出しています。作業担当は、ダニエルの職人さんでこ



① | 背とアームの中身はモールドウレタンで制作されていた。表面を取り除いて高反発ウレタンで覆い、フォームを再現



R_04

ファイヤープレイスチェア (イージーチェア)
Fireplace Chair (Easy Chair)

エドワード・キントラーセン (1901-1982)、
トーベ・キントラーセン (1906-1994)
Edvard Kindt-Larsen, Tove Kindt-Larsen

グスタフ・ペーテルセン (デンマーク)
ナラ、革張り
不明 (1939年)
I.S.U. house 上柳 上柳征信
背座の張り替え

12 | ジュートなどでできた麻布で、主にクッションパネなどの中材を押さえる下張り材として用いられる。テープ状にしたものは力布として底張りに使われる。

R_05

モーダス (イージーチェア)
Modus (Easy Chair)

クリスチャン・ヴェデル (1923-2003)
Kristian Vedel

ソーレン・ウィラセン (デンマーク)
ローズウッド、革張り、革クッション
不明 (1963年)
ダニエル社併設「家具の病院」 星野浩幸
背・座・アームの張り替え



② | 座の中身はウレタンチップと羽毛で構成されたクッション。へたった綿を取り換えた



R_06

FH4305 (イージーチェア)
FH4305 (Easy Chair)
カレン・クレメンセン (1917-2002)、
エベ・クレメンセン (1917-2003)
Karen Clemmensen, Ebbe Clemmensen
フリッツ・ハンセン (デンマーク)
ブナ、タモ、革、布張り
不明 (1963年)
ダニエル社併設「家具の病院」 吉田昌義
背座の張り替え



① | 背表は発泡ウレタン、背裏は綿が敷かれていた



② | 木枠にクッション材を張り、背表、背裏の2枚の生地を張って溝に沿ってタッカーで留めていく

の年代の製品に精通している星野さんをお願いしました。

島崎 | 次が、フリッツ・ハンセン社の《FH4305 (イージーチェア)》^[R_06]。デザイナーはカレン・クレメンセン (1917-2002) とエベ・クレメンセン (1917-2003)。

濱田 | 修理前は生地の褪色が進み、中が砂状になっていました。

島崎 | このクッションは、アームの芯が入っていないところとか、形がきちっとしていないところがあって、最初に発表されたときは驚きでしたね。

濱田 | 背座はビーチ (ブナ) の木枠です。背表側にフォームラバー、背裏に綿をまわしてフォームを出していて、アッシュ (タモ) のフレームが軽い印象を作っています。実際に持ち上げたときにも軽くて衝撃的でした。これもフォームラバーがグズグズになっていて、新しくウレタンフォームを取り付けています。

島崎 | フォームラバーは特に加水分解が早いですね。

濱田 | 座る部分に関しては、非常に劣化しているのですが、さすがフリッツ・ハンセン社、ビーチの綺麗な木枠はしっかりしていて、見えない部分なのに非常にいい物作りをしていると感じました。この上張りのクヴァドラ社 (Kvadrat)^{註13)} のトーナス (Tonus) の生地色は廃番になってしまっていたものを、まだ何メーカーが残っているとのことでデンマーク本国から取り寄せました。

島崎 | アームの革が割合と元気だね。

濱田 | そうですね。革はそのままです。

島崎 | これまた重い椅子で、《JH703 (イージーチェア)》^[R_07]。新しくクヴァドラ社の生地を張ってもらいました。クヴァドラ社はオーフスに近い北ユトランドの魅力的な小さな街エーベルトフトにあって、今やデンマークのみならず、世界中の張り生地のメーカーになっています。

濱田 | かなり重い椅子で、ちょっとウェグナーに見えないような、ヨハネス・ハンセン社



① | 緑の木は装飾とタッカーを隠す役割がある



② | 座のフォームラバー。成型時に型押しでクッション性を増している



③ | アーム部分は、ペーパーをあてて染料系のラッカースプレーで色と艶を合わせ、褪色部分を補色している

13 | 1968年創業のデンマークのファブリック・デザインテキスタイルメーカー。バリエーション豊かなコレクションを持ち、家具の張り生地やカーテン生地として世界中で人気が高い。近年では皆川明が主催するミナ・ベルホネンとのコラボレーションや、南青山にショールームを構えるなど、日本でも浸透度が高まっている。

R_07

JH703 (イージーチェア)
JH703 (Easy Chair)
ハンス・ウェグナー (1914-2007)
Hans J. Wegner
ヨハネス・ハンセン (デンマーク)
スチールパイプ、ナラ、布張り
1973年 (1965年)
ダニエル社併設「家具の病院」 吉田昌義
背・座の張り替え、木部褪色の修正



(Johannes Hansen)^{註14)} で昔作っていたものです。上張りは、クヴァドラ社のハリンダール (Hallingdal) という生地を使いました。60年代終わりか、70年代にオフィス向けのシリーズとして量産されていたはずで、クッション材としてフォームラバーが使われています。

島崎 | フォームラバーの裏側がおもしろいんだ。

濱田 | そうですね。フォームラバーは型に流し込んで、加熱して作っていくんです。石油が成分のウレタンと違い、フォームラバーはゴムが素材です。後年、結局ウレタンのほうが扱いやすいということで、取って代わられてしまったのですが、この時代では最先端の素材でした。ただ、表面がグズグズになっているため、今回ウレタンに変更しています。

島崎 | 今でもフォームラバーはほとんど知られていない。そういう意味では、修理の過程やサンプルを資料として残していくのは、いいことだと私は思います。

濱田 | そうですね。全体的に見回していくと、結局天然素材があって、フォームラバーがあって、ウレタンがあってというかたちで、詰め物にしても張り方にしても、あらゆるものが進化していつているのだと、かなり実感しています。

背も座も生地は左右の側面にタッカーで留めてありました。その上に釘隠しとしてオーク (ナラ) の棒が左右に取り付けられてデザインポイントになっています。メンテナンスを想定した処理です。

島崎 | 《BO-59 (イージーチェア)》^[R_08] は、ボタンが紛失していました。

濱田 | 座クッションを裏返したら、同じようなボタンが付いていたので、それを表に移植しました。また、右のアームの薄い部分にできたささくれ状の破損を、サンディングして加工しました。

島崎 | 次が《ロンド (アームチェア)》^[R_09]。当時の世界的なベストセラーで、形といい座り心地といい、とてもよく、日本でも大変売れた椅子です。スタッキングできる反面、上に



アーム部分の先端が少し割れていたため、割れた跡をサンドペーパーでサンディングして毛羽立ちを抑えた

14 | 巧みな木工技術を持ち、ハンス・ウェグナーの右腕として数多くの名作を生み出した職長ニルス・トムセンがいたことでも知られ、「伝説の家具工房」と評される。戦後、ノル・インターナショナル社が代理店となってアメリカ市場にも進出した。



R_08

BO-59 (イージーチェア)
BO-59 (Easy Chair)
フィン・ユール (1912-1989)
Finn Juhl
ボヴィルケ (デンマーク)
ブナ、布張り
不明 (1952年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
アーム部分の割れのサンディング、クッションボタンの移設



R_09

ロンド(アームチェア)
Rondo (Arm Chair)
ヤン・ルンネ・クヌッセン(1922-1990)
Jan Lunde Knudsen
ソルリエムープレル(デンマーク)
スチールパイプ、革張り
スタッピング
不明(1963年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
背・座の張り替え、脚の歪み矯正、座裏のスペーサー・リベットの作成



① | リベットで座と脚部をかしめ留めている



② | かしめ留め部分を切り取って座に鬼目ナットを仕込み、ボルトで脱着可能な仕様に変えた

重ねる椅子の脚の先端が、下の椅子の座面に当たることで、その部分が傷んでいきます。

濱田 | 座のクッション材はウレタンです。張りは黒革で、やはり表面が劣化していくのですが、この椅子に関しては生きていました。ですが座り心地を考慮して、変えています。

他にもいろいろなところが少しずつ壊れていて、座の裏に十字の貫が入っていて、この貫を貫通するリベットで、座は嵌め殺しになっていました。座がリベットでかみ締められて脚から離すことができないようになっていたので、張り替えは前提にされていないようです。これは一旦リベットを切断して、座に鬼目ナットを取り付けて、六角のボルトで貫に留められるよう改良しました。貫と座の間に樹脂のスペーサーが取り付けられていましたが、いくつか欠品していたので再制作しています。

島崎 | 「家具の病院」をやっているのわかるのですが、どんなにベテランでも直すときに初めての形、初めての風合いに出くわすわけで、それをどうふうに直してい

くかは、デザインや構造や素材に幅広い知識があるかどうかで随分違いますね。

濱田 | 次は、《自由学園明日館 ホールの椅子(サイドチェア)》^[R-10]。座面が破れている症状とは別に、一部分が内側から相当盛り上がっていました。どうしてだろうと思って張り生地を剥がしてみたところ、中のバネ(コイルスプリング)を載せてあった力布が切れてしまっていたために、下から板を打ち付けていたんですね。上から腰かけたとき、普通はその力布もたわんで、バネの反発を受け止めるのですが、板を下から打ち付けてしまったものだから、上向きにだけバネの圧力がかかって、だんだん耐えきれなくなって爆発したような感じでした。

島崎 | これは遠藤新が設計しましたが、作っているのは大工で、仕事がラフだったところがあったのでしょうか。あるいは、自由学園は木工で様々な家具を作る授業がある学校だったので、生徒が板で直したのかもしれないですね。

濱田 | 何回か張り替えはされていると思うのですが、バネが入っていてあおり留めされていたようで

R_10

自由学園明日館 ホールの椅子(サイドチェア)
Jiyu Gakuen Myonichikan Hall Chair (Side Chair)
フランク・ロイド・ライト(1867-1959)、
遠藤新(1889-1951)
Frank Lloyd Wright, Arata ENDO
学校法人自由学園(日本)
ナラ、革張り
不明(1921年頃)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
座の張り替え



① | バネの力に押されるように、表面のシートが切れ、バネを抑えていた紐も切れたため、座が異常に盛り上がっていた



② | 底に打ち付けてある板を取り除き、ウェビングテープとバネを敷きなおした



③ | シートの中身は海藻のようなものと黒綿、白綿



① | 元ハーマンミラーの社員曰く、ノーガハイドが強すぎて、クッションのへたりとともに座の生地が下に引っ張られて縫製部分から破れてくることが多い

すね。

島崎 | 次はチャールズ・イームズ(1907-1978)の《LAR(アームチェア)》^[R-11]。今、ハーマンミラー社は自社製品を一切直さないんですよ。日本のメーカーが最近、直すことで顧客を引き付けようとし始めているの逆で、商業政策として直さないことにしている。もとの張り生地は1940年代後半のもので、最初イギリスで製造され、その後アメリカで作られたノーガハイド(Naugahyde)^{註15)}という、ビニル系の高品質な素材が張られています。へりのところは、リム(モール)を嵌め込むわけです。

濱田 | リムが硬くなってしまっは人力では難しい。

島崎 | 人力では曲げるのも難しいですね。それから、破れてきたところも張り替えています。

濱田 | レザーは先ほどもご紹介がありましたノーガハイドという、結構特殊なビニルレザーでして、当初は日本製のビニルレザーで張り替えをできないかと思っていたのですが、ノーガハイドと日本のビニルレザーは厚手が違いますし、学生さんもよく座るので、オリジナルに戻していこうと方針を決めました。ただ問題は、流通していないノーガハイドをどうやって手に入れるかということでした。ところが、ノル社(Knoll)^{註16)}の現行ラインナップにあるハリー・ベルトイア(1915-1978)の《スモールダイヤモンドチェア》のシートに使われているノルテキスタイル「Vinyl」の正体が実はノーガハイドだったことを突き止めました。それをノル・ジャパン社からメーター単位で取れることがわかり、供給が実現しました。

残る問題はリムです。これに関しても問題が多くて、ハーマンミラー社で張り替えをしていないため、市販されていないんです。よくネットに出ている某社が、このリムの糸目を1周ぐるっと接着剤で固めてから糸目に沿って張り生地を切って剥がして、縫製をしないで、接着だけで張り替える修理をしていますが、それでは「貼り替え」なので修復としてはだめなんですよ。張り生地とリムと一緒に縫える職人さんを探す必要がありました。

結果、目黒のマシン・エイジ社の須田哲正^{すだてつまさ}さんがリムを作っていて、なおかつ彼のところの職人さんが縫製を日本で唯一できることがわかり、ほぼオリジナルのかたちに戻すことができました。ただ、金額的には結構かかりました。

島崎 | 次はブルーノ・マツソン(1907-1988)のダックス社(DUX)の《マツソンチェア(イージーチェア)》^[R-12]。

濱田 | これに関してはスナップボタンを留めている革のベル



② | マシン・エイジで張り替え用に作成しているモール



R_11

LAR(アームチェア)
Lounge Armchair Rod-1 (Arm Chair)
チャールズ・イームズ(1907-1978)
Charles Eames
初号製造: ジーニス・プラスチック(アメリカ)
販売: ハーマンミラー(アメリカ)
FRP(繊維強化プラスチック)、スチールロッド、
ゴム、革張り
不明(1953年)
マシン・エイジ
ビニルレザーの張り替え

15 | アメリカ・ユニロイヤル社のビニルレザー(人工皮革)で、クラシックからモダンまで幅広いバリエーションがある。安価で手入れが簡便なことから家具や雑貨を中心に幅広く利用され、1960年代に世界中で一大ブームとなった。ハイドとは、カウハイド(牛革)やホースハイド(馬革)と表されるように皮革の意で、同社は当時盛んだった動物愛護運動を逆手にとり、ノーガという醜いモンスターが2年に1度脱皮する革という架空の設定でプロモーションを展開した。

16 | ドイツ生まれのハンス・ノルによって1938年にニューヨークで設立。ハーマンミラーと双璧をなすミッドセンチュリーの代名詞として有名な世界的家具メーカー。



R_12

マツソンチェア(イージーチェア)
Pernilla (Easy Chair)
ブルーノ・マツソン(1907-1988)
Bruno Mathsson
ダックス(スウェーデン)
布、布張り/成型合板
1970年(1941年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
肘下のクッションを留めるスナップボタンの再現



クッションが開けずミンが使えないため、手縫いで取り付けた。下がオリジナル、上が再現

17 | 家具職人のアイナーとラースのベダーセン兄弟が1953年に創業したデンマークの工房。当初はボヴィルケ工房やAPストーレン社の下請けであり、ヨハネス・ハンセン社製品の原型開発などもおこなっていた。1960年からハンス・ウェグナーとの協働が始まり、現在は《ザ・チェア》や《ピーコックチェア》をはじめとする、かつてヨハネス・ハンセン社が生産していたウェグナー家具の生産もおこなっている。



R_13

PP201 (アームチェア)
PP201 (Arm Chair)
ハンス・ウェグナー (1914-2007)
Hans J. Wegner
PPモブラー (デンマーク)
タモ、ナラ、紙細編み
1975年 (1969年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
笠木の補修跡修正

トが切れてしまったので、そこを再生した状態です。

木製椅子の修復 ― 欠け・割れ

島崎 | 木製の椅子、PPモブラー社 (PP Møbler)^{註17)} の《PP201 (アームチェア)》^[R_13] で



木目と直行して割れている部分に、接着剤がはみ出しているような雑な修復が施されていた

すね。どこで傷めたかはわからないのですが、木部に大きな力がかかって割れていました。

濱田 | 強烈な衝撃が加わって笠木が割れていました。ちょっと白く見えているのは、恐らく以前所有していた方が接着剤でつけた部分です。笠木のところを作り直す手もちろんあるんですが、費用がかかってしまうため、割れ目にパテを入れてひびを補修しました。《グランプリチェア (サイドチェア FH4130)》^[R_14] に関して、なにか落としたのか、座の表面の突板が壊れてしまっていたのと、向かって左側のところも欠けてしまっていたのを、パテを入れて木目を描くという補修で仕上

げています。割と目立たなくなっただと思います。

島崎 | 《アックスアームチェア (イージーチェア FH5250)》^[R_15] は、ラケット構造のところが少し切れてしまっていた。

濱田 | そこを黒いパテで補修した感じです。写真で見ると結構目立ちますが、実物はそんなに目立たなくなっています。ラケットの中の駒の合板が割れてしまったので、そこを埋めて直しました。

島崎 | ラケット構造は、フリッツ・ハンセン社が大変な努力をして作って、駒を入れるのも世界で最初にやったのですが、最初の駒入れ成型はやはり精度が低く、このようなトラブル



R_14

グランプリチェア (サイドチェア FH4130)
Grand Prix Chair (Side Chair FH4130)
アルネ・ヤコブセン (1902-1971)
Arne Jacobsen
フリッツ・ハンセン (デンマーク)
チーク / 成型合板
不明 (1957年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
座の突き板剥がれの修正



表面をパテ埋めして着色して補修した



R_15

アックスアームチェア (イージーチェア FH5250)
AX Arm Chair (Easy Chair FH5250)
オーラ・ミユルガード・ニールセン (1907-1994)、
ペーター・ヴィッツ (1916-1986)
Orla Mølgaard-Nielsen, Peter Hvidt
フリッツ・ハンセン (デンマーク)
ブナ、チーク、マホガニー / 成型合板
組立式
1950年 (1950年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
ラケット構造部分の修正



隙間とひびにパテ埋めを施した

はしょっちゅうありました。分解するわけにもいかないので、きれいに直すのは難しいでしょう。本来、4本の貫の両端に埋められたボルトが左右逆ネジとなって、回転によって左右の脚とフレームが開閉する機構になっています。しかし、ボルトとナットの経年変化により、おそらく錆で回転しなくなっていました。

濱田 | 次がアルテック社 (Artek)^{註18)} の《ペンションチェア (イージーチェア No.406)》^[R_16] です。座を支えている貫のホゾが経年で緩んできてしまったので、一旦開いて締め直しています。

島崎 | どうやったのでしょうか。

濱田 | 単純に開いて、ホゾに付いた接着剤を鑿で取って、圧着し直しました。完全な分解まではしていません。アルテック社の製品はすごく簡単に修理ができるので、それは利点だと思います。



ホゾを開けるところまで開き、接着剤を除去後に締め直した

籐家具のメンテナンス

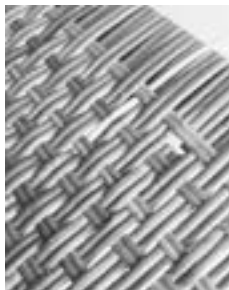
濱田 | カール・ハンセン & サン社の《CH27 (イージーチェア)》^[R_17]。カール・ハンセン & サン社の製品はすべてに製造年が刻印されていて、デザイン自体は1949年から1950年ですが、製造年が「AK71」となっていて、1971年に作られたものだということがわかりました。

島崎 | 刻印はどこに？

濱田 | アームの裏です。1971年製ということは、製造時点で20年ぐらい販売されている、いわゆるロングセラーの商材です。ところどころ籐が切れてしまっています。籐が切れると、そこを起点にしてほかのところも切れていく懸念があります。この椅子の籐に関しては、すごくいい餡色になっているということと、切れている箇所が数か所だけということもあり、全面張り替えはやめて、破断した部分だけに新しい籐を入れ込んで直しています。ただ、荷重がかかる角に関しては、部分的ではなく一本丸ごと取り替えています。後ろから見ると入れ込んだ部分だけ色が薄くなっているのがわかると思います。籐は色が定着しにくい素材で、少し薄めの着色を、だんだんなじむように少しずつ塗り重ねています。

島崎 | 《CH27》^[R_17] は今後、製品化はないだろうね。ペーパーコードで編んでいるようなものはあるけれど。

濱田 | そうですね。これは釘で留められていたので、古い職人さんが作っていたのではないかと思います。最近ですと、籐の場合は4ミリぐらいのタッカーで打ち付けています。



幅5ミリ前後の皮籐を国内で調達して使用。籐自体は東南アジアの物で、日本の職人によって加工されている

18 | 建築家のアルト夫妻と哲学者のニルス=グスタフ・ハール、出資者のマイル・グリクセンの4人が1935年に創業したフィンランドの家具販売会社。アルト家具を販売し、建築や展示会を通じて社会啓蒙活動をおこない、自分たちの考えを広めていく仕組み作りをおこなっている。社名は Art と Technology の融合したモダニズムを目指すという考え方に由来する。



R_16

ペンションチェア (イージーチェア No.406)
Pension Chair (Easy Chair No.406)
アルヴァ・アアルト (1898-1976)
Alvar Aalto
アルテック (フィンランド)
カバ、キャンバス張り / 成型合板
1970年 (1939年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
座下のホゾ締め直し

R_17

CH27 (イージーチェア)
CH27 (Easy Chair)
ハンス・ウェグナー (1914-2007)
Hans J. Wegner
カール・ハンセン & サン (デンマーク)
ナラ、籐張り
1971年 (1949年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
籐の劣化による破断の補修





R_18

SW96 (イージーチェア)
SW96 (Easy Chair)

フィン・ユール (1912-1989)
Finn Juhl

ソーレン・ウィラセン (デンマーク)
ナラ、チーク、籐張り
不明 (1956年)
北欧家具修理 Sitwell 濱田伸行
籐の劣化による全面張り替え



① | 籐の経年劣化によって破断が生じている



② | しなやかに曲がるように水に皮籐を浸して1本ずつ張る



③ | 木枠に巻きつけ背と座の接点に巻き終わりがくるように調整しながら釘で留める

島崎 | 籐を釘で留めると、うっかりすると割れるからですね。今、天然素材の椅子で一番問題になっているのが籐張りです。現代の住環境は高断熱、高気密なため、籐にとって必要な湿気が足りず、あちこちが切れるトラブルが起きています。

濱田 | 《SW96 (イージーチェア)》^[R-18]も籐張りで、フィン・ユールがデザインした椅子です。いたるところが切れてしまっているので、全面張り替えています。日本では籐を扱う会社の加工技術が高く、肉厚で幅も均一なクオリティの高い籐の皮が作られているので、日本のものを採用しています。

島崎 | 修復部がちよっと目立つけども、これはやむを得ない。自然のものだから経年変化を待つしかない。

濱田 | 木部のオークは経年変化した色のままなので、もともとはこんなにコントラストはついていなかったと思います。

島崎 | 次はトーネット社の《チェスカ (アームチェア B64)》^[R-19]。

濱田 | マルセル・ブロイヤー (1902-1981)^[註19]の定番の製品です。籐はどうしても予期せずパキッと切れていきますね。

島崎 | 修理について、トーネット社の椅子を長く取り扱ってきて、自社工場での加工もしているアイデック社 (AIDEC)^[註20]に依頼をしたのですね。

濱田 | そうです。島崎先生も関わられている会社ということで、東京営業所の佐々木さんに快く引き受けていただきました。

島崎 | 基本的に、トーネット社のものはトーネット社の製品をずっと扱っているところで直すのがルールだと思うし、ノウハウを積んでいるところで直してもらうことが大切だと思います。

濱田 | アイデック社でも籐の張り替えの依頼は多いようで、修理のシステムがすっかりできあがっていました。

島崎 | 現在のアイデック社が行なう修理は、座の裏にメッシュのきれを張り、力を分散させていると聞いたことがあります。やっぱりそこは作られた時代で違うのでしょうか。

濱田 | 最初、アイデック社でもその方法を提案されたのですが、ムサビの収蔵品ということで、できる限りオリジナルの姿に戻す方向で進めました。

作業工程としては、座面に籐シートを嵌め込むための溝があるのですが、まずこの溝に埋まっている籐の丸芯を接着剤ごと撃でさらっていきます。この作業が非常に大変で、接着剤がうまく取れてくれないと、きれいに見えないのです。

島崎 | 最初に作られた1928年は、ここは溝ではありませんでした。全部、手編みで一つの

19 | 近代デザインを牽引したハンガリー生まれの家具デザイナー・建築家。ワイマールのバウハウスで家具制作を学び、その後、ユダヤ人であったためにナチスから逃れ、イギリスを経てアメリカへ渡りニューヨークを拠点とした。1920年代に発表したスチールパイプの椅子は当初トーネット社で量産されたが、1962年にイタリアのガヴィーナ社が《B3》や《B32》《B64》の再生産を開始したことから、現在はガヴィーナ社の事業を継承したノル・インターナショナル社とトーネット社の2社で生産されている。

20 | ドイツ・トーネット社の日本総代理店および東欧の曲木家具輸入販売代理店として1976年に東京に設立された家具輸入・メーカー。



R_19

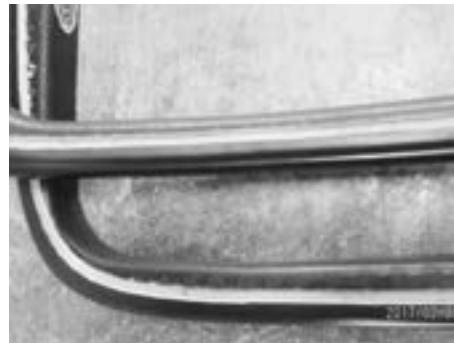
チェスカ (アームチェア B64)
Cesca (Arm Chair B64)

マルセル・ブロイヤー (1902-1981)
Marcel Breuer

ゲブリューダ・トーネット (オーストリア)
スチールパイプ、ブナ、籐張り
1977年 (1928年)
AIDEC
籐シートの張り替え



溝に埋め込んである古いシートを撃でさらう



新しい材料を水に浸け、水が滴らなくなる状態に準備する



くさびを使って溝にシートを押し入れて、ボンドと5ミリ径の丸芯で留める

穴に12本入っていたのです。

濱田 | いろいろ進化しているのですね。この接着剤を取る作業が、おそらく一番手間がかかります。張り直す作業は、手編みなら時間はかかりますが、いまは籐を編んだシートがロールでありますから、切り出して溝に入れていく作業なら、さほど時間はかからないかと。もちろん簡単というだけでなく、手慣れた職人さんですので、編目の縦も横も非常にまっすぐ張っています。乾燥していくと、気持ちいいぐらいにサーッと伸びて、弾力性が生まれていきます。

島崎 | これで当然、座ってもピリッとはいかないはず。

濱田 | 籐製品は、現代の環境ではなかなか扱いが難しいところがあります。

島崎 | 昔、長大作が《ザ・チェア》の籐張りの座面を切ってしまったときに、PPモブラーのアイナー・ペダーセン (1923-2016) に聞いたら、「厚いバスタオルを硬く絞ったのを座の上に置いて一晩置いて、それを年に2回ぐらいやってくれ」と言っていましたね。自然の素材はある程度の水分が必要なのですが、今は室内が乾燥していますからね。昔はビルといえども隙間風があり、空調も完全でなかったのが、かえってよかったのですが。

濱田 | 多湿な東南アジアの素材ですし、保湿はやっぱりこまめにしていかないと、いつ切れるかわからないですね。

島崎 | 《チェスカ》^[R-19]でもトラブルが多くなってきているし、メンテナンスが大変だという話だね。それで今はメッシュのシートが張ってあるわけですね。

濱田 | 一方で張り方もどんどん進化している状況があります。籐は他にない高級感を感じさせられる素材であり、軽くもある。今後もなくならないでしょう。

まとめ — すべてを共有し、すべてを記録する

島崎 | 最初にお話ししたように、われわれは今回の補修の記録は、日本の家具産業の歴史

武蔵野美術大学は、平成28年度本事業にて開催した「プロダクト・デザイン研究会」のなかで「プロダクト・デザイン定義案」【図1】と「デザインミュージアムプロダクト・デザイン収集対象案」【図2】を策定した。

後者は「もし日本にデザインミュージアムが設立される場合にプロダクト・デザインはどのような観点でどのようなものを収集するべきか」という課題にアプローチするために、様々な製品群を縦軸に、プロダクト・デザインの定義案を横軸に組んだマトリックスであった。

平成29年度はこの収集対象案をさらに展開させ、より実践的な事例で検証することを試みた。具体的には武蔵野美術大学美術館・図書館が「収集したデザイン資料群」と「今後収集すべきと想定する資料群」のサムネイル画像を制作年順に配置した年表を二種類（椅子版、椅子以外のプロダクト・デザイン版）制作した。

当館はこれまでデザイン資料の収集に力を入れてきたが、少なからず偏りもあり、全く未着手の領域も存在する。これまでに蓄積した収集実績と今後の希望を込めた収集予定を一望できるようにしたことで、今後のコレクションをどう展開していくべきか、中長期的視点に立ち俯瞰できる機会を得た。

同時に、ある美術館における価値基準による体系的情報がより多くの人と共有されることで、「デザインミュージアムはどのようなものを収集するべきか」という議論が活性化することも期待したい。

なお、この「デザインミュージアム コレクションプラン」は本報告書の表紙裏に添付した。

の中で、大変重要なことだと考えています。ひとつのやり方をしっかりと記録として残し、みんなが将来にわたって考えていけるものにしたい。誰が、いつ、どこで直したかのアーカイブをしっかりと、次に直す人へ伝えていく。「この部分はこういうふうにやっただけ、後で直すときはここに注意して」というようなことも詳しく残していこうと考えています。

濱田 | 今回19脚の修復をさせていただいて、椅子それぞれで作り方、直し方に様々なやり方があるということ、歴史を紐解いてみると素材一つひとつに成り立ちや経緯があることが勉強になって、作業をしていて楽しかったです。

島崎 | 研究者として、椅子を系統立ててコレクションしてきた立場から言うと、修理をお願いしたそれぞれの会社の方々に、修復したことで生まれたノウハウ、そして会社としてトラブルはあまり言いたくないかもしれませんが、それをもすべて共有すべき知識として教えていただくことは、これから必要ではないかと思っています。それこそが、ものを愛することだと思います。

濱田 | そうですね。先ほどのダニエル社の職人さんのように、直せる方が高齢になっていく中で、誰でもわかる詳しい記録を今のうちに残しておけば、「この時代はこうやっていた」という経験と知識が引き継いでいける気がします。

島崎 | 椅子を分解したときに、どういう素材を使って、クッションの中にどういうものを使ってきたかということも詳細に残しながら、できればそのサンプルも一部取っておく。そして補填には普通の素材を使うことにしたのか新しい素材を使うことにしたのか、その判断の理由まで、すべて記録しておく。これは、30年後、40年後にまた直すことになったとき、その人に十分な情報を伝えるためです。今の修理作業は、過去から現在への、そして未来への連続性の中の一時期であり、2017年に直すわれわれは、どうやって直したのかということ、このコレクションを後に直す人に、十分に伝える義務があります。

濱田 | 私自身、今回の修理で、椅子一つひとつの中身を開け、貴重な経験をさせていただきました。

島崎 | 濱田さんくらいの若い方で、そういうことをやってくれる人たちが増えていかないとね。本当の豊かな暮らしは、自分が愛着を持っているもの、長く使っているもの、傷や修理の跡も含めて、自分の生活史に囲まれるということだと思います。日本にはもともと、経年変化による美しさも大切にす文化があるのだから。

修理について、本日のお話も記録を作りますし、なおかつ、修理してこなかった他の椅子も、これから修理する際には記録を作って残していこうと思っています。

今のムサビコレクションの修理状況は、まだまだ十分ではありません。中には、本当は革もしっかり張り替えたほうがいいけれど、コストやいろいろな問題で、クリーニングで済ませておくしかないものもあります。それも含めて記録して、何十年後に次のバトンを受けた方が、経緯を見ながら引き継いでいただければと考えています。濱田さん、皆さん、本日はありがとうございました。

プロダクトデザイン定義(案)

対象となるプロダクトは、以下の絶対条件(2項目)に該当し、選択条件より1項目以上に該当する。

絶対条件	プロダクトデザイン定義における必要条件
1	量産を目的として製造されている
2	近代以降に使用、製造された生活用品 (近代以降: 19世紀後半以降、ロンドン万博、モリス、明治維新を目安とする)

選択条件	必ず1項目以上に該当しなければならない条件
1	重要なクリエイターが携わっている
2	優れた製造者(社)による製品である
3	デザイン(形状)が優れている(美しい、独自性がある、革新的であるなど)
4	革新的な素材が用いられている(素材の転換点にあたる製品)
5	製造技術において革新性がある(技術的転換点にあたる製品)
6	ある時代を切り拓くような貢献をした機能を有する(エポック)
7	利用方法、使用方法の転換点にあたる
8	経済性や流通性能が秀でている
9	後世に与えた影響が大きい(技術の普及、一般化において転換期にあたる製品)
10	後世に与えた影響が大きい製品(デザイン)の影響を受けて生産された
11	開発背景にあるデザイン思想が特筆に値する
12	初号製品

デザインミュージアム プロダクトデザイン収集対象案

2023年10月現在
2023.10.23

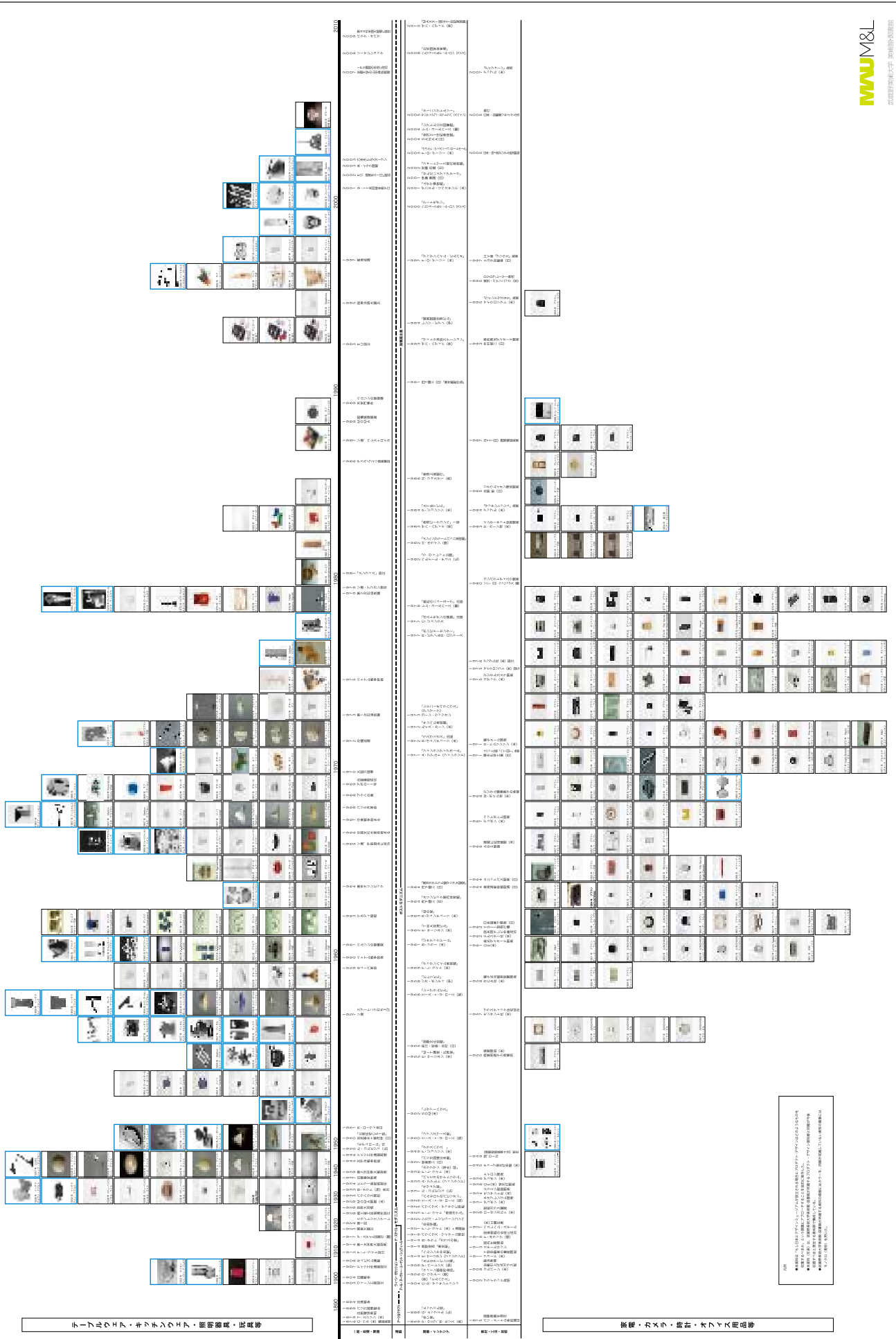
カテゴリ	空間	製品	製品名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
				重要なクリエイターが携わっている	優れた製造者(社)による製品である	デザイン(形状)が優れている(美しい、独自性がある、革新的であるなど)	革新的な素材が用いられている(素材の転換点にあたる製品)	製造技術において革新性がある(技術的転換点にあたる製品)	ある時代を切り拓くような貢献をした機能を有する(エポック)	利用方法、使用方法の転換点にあたる	経済性や流通性能が秀でている	後世に与えた影響が大きい(技術の普及、一般化において転換期にあたる製品)	後世に与えた影響が大きい製品(デザイン)の影響を受けて生産された	開発背景にあるデザイン思想が特筆に値する	初号製品			
L Living room	kitchen / Dining room	食べる	1															
			2															
			3															
			4															
			5															
			6															
		7																
		8																
		9																
		10																
		11																
		12																
		13																
		14																
		15																
		16																
		17																
		18																
		19																
		20																
		21																
		22																
		23																
		24																
	25																	
	26																	
	27																	
	28																	
	29																	
	30																	
	31																	
	32																	
	33																	
	34																	
	35																	
	36																	
	37																	
	38																	
	39																	
	40																	
	41																	
	42																	
	43																	
	44																	
	45																	
	46																	
	47																	
	48																	
49																		
50																		
51																		
52																		
53																		
54																		
55																		
56																		
57																		
58																		
59																		
60																		
61																		
62																		
63																		
64																		
65																		
66																		
67																		
68																		
69																		
70																		
71																		
72																		
73																		
74																		
75																		
76																		
77																		
78																		
79																		
80																		
81																		
82																		
83																		
84																		
85																		
86																		
87																		
88																		
89																		
90																		
91																		
92																		
93																		
94																		
95																		
96																		
97																		
98																		
99																		
100																		

デザインミュージアム プロダクトデザイン収集対象案

カテゴリ	空間	動向	製品名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13		
				製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名
L Living room	Living room	読む	01 アスタロイト															
			02 天板															
			03 フォトフレーム															
			04 鏡															
			05 テーブル															
		書く	06 鏡															
			07 アスタロイト															
			08 シェルフ															
			09 フォンテー															
			10 時計															
		収納	11 アイロン															
			12 スクン															
			13 カーテン															
			14 椅子															
			15 椅子															
	bathroom / bed room	洗濯する	16 アイロン															
			17 スクン															
			18 アイロン															
			19 アイロン															
			20 アイロン															
		整理する (洗面)	21 アイロン															
			22 アイロン															
			23 アイロン															
			24 アイロン															
			25 アイロン															
		整理する (寝具)	26 アイロン															
			27 アイロン															
			28 アイロン															
			29 アイロン															
			30 アイロン															
	入浴する	31 アイロン																
		32 アイロン																
		33 アイロン																
		34 アイロン																
		35 アイロン																
	W Office / Study room	整理する	36 アイロン															
			37 アイロン															
			38 アイロン															
			39 アイロン															
			40 アイロン															
		記録する	41 アイロン															
			42 アイロン															
			43 アイロン															
			44 アイロン															
			45 アイロン															
書く/学ぶ		46 アイロン																
		47 アイロン																
		48 アイロン																
		49 アイロン																
		50 アイロン																

デザインミュージアム プロダクトデザイン収集対象案

カテゴリ	空間	動向	製品名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13		
				製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名	製品名
D In door	読む	読む	01 天板															
			02 フォトフレーム															
			03 鏡															
			04 テーブル															
			05 鏡															
	書く	読む	06 鏡															
			07 アスタロイト															
			08 シェルフ															
			09 フォンテー															
			10 時計															
	整理する (洗面)	読む	11 アイロン															
			12 アイロン															
			13 アイロン															
			14 アイロン															
			15 アイロン															
整理する (寝具)	読む	16 アイロン																
		17 アイロン																
		18 アイロン																
		19 アイロン																
		20 アイロン																
Outdoor	整理する	21 アイロン																
		22 アイロン																
		23 アイロン																
		24 アイロン																
		25 アイロン																



3章

データベースの管理、運用、利活用 Section 3. The maintenance, operation, and utilization of databases

- 公開講座「座って学ぶ椅子学講座2」
- プロダクト・デザイン関連展データベース構築
- 所蔵機関横断データベース(プロトタイプ)の構築と拡充

武蔵野美術大学 美術館・図書館では、1967年の開館以降、近代椅子の収集を始め、現在では約400脚におよぶコレクションを形成している。本講座は、講師に本学名誉教授であり当館の近代椅子コレクションの形成に中心的に携われた島崎信氏を迎え、コレクションのなかから精選した約300脚を、一脚ずつ詳細に解説する構成で、平成28年度に「座って学ぶ 椅子学講座」として全8回開催し、引き続き平成29年度には「座って学ぶ 椅子学講座2」として全4回の講座を開催した。前年度に引き続き今年度も、本講座の様子は記録集「座って学ぶ 椅子学講座2—ムサビ近代椅子

コレクション400脚」としてまとめた。

また本事業では、講座の様態を撮影した記録映像を、各椅子の解説動画として分割再編集し、本事業Webサイト内「プロダクトデザイン・データベース」(<http://www.d-archive.jp/product/product-design-db>)を通じて一般公開している。

所蔵機関においては、展覧会をはじめ、ワークショップや講演会などの所蔵品の利活用を通じて、新たにアーカイブすべき情報が生成されることもある。本講座は、所蔵資料の利活用からアーカイブを構築する、という新たな試みでもあった。



座って学ぶ 椅子学講座2 —ムサビ近代椅子コレクション400脚—

会場 | 武蔵野美術大学美術館 椅子ギャラリー

講師 | 島崎 信(武蔵野美術大学名誉教授)

定員 | 各回25名

参加費 | 無料

対象 | 下記のいずれかに当てはまる方を中心に募集。

- 生活デザイン資料の中でも、とりわけ椅子に関心をおもちで、これについて専門性を高めたい方
- 当館コレクションの周知にご協力いただける方
- 建築家、インテリアデザイナーをはじめとするデザイン関係者の方
- マスコミや編集者をはじめとするプレス関係者の方
- 学校教職員の方

申込方法 | 下記必要事項を記入の上、メールでの事前申し込み

氏名、年齢、所属、仕事や専門の具体的な内容、連絡先、参加希望日、上記募集対象のうち該当する項目、志望動機(800字以内)

	日時	講座名	出演者	来場者数	会場
1	2017年6月24日(土) 14:00~17:00	第1回『日本の椅子①』 ●戦前の様式	島崎 信(武蔵野美術大学名誉教授)	21名	椅子ギャラリー
2	2017年7月15日(土) 14:00~17:00	第2回『日本の椅子②』 ●多様な生産技術	同上	24名	椅子ギャラリー
3	2017年9月23日(土) 14:00~17:00	第3回『日本の椅子③』 ●広がる椅子のかたち	同上	17名	椅子ギャラリー
4	2017年11月11日(土) 14:00~17:00	第4回『折り畳み椅子の機構と可変性』	同上	20名	椅子ギャラリー

平成28年度 「座って学ぶ 椅子学講座」

	日時	講座名	出演者	来場者数	会場
1	2016年5月28日(土) 14:00～17:00	第1回『近代椅子の源流』 ●4つの潮流	島崎 信(武蔵野美術大学名誉教授)	35名	第10講義室
2	2016年7月2日(土) 14:00～17:00	第2回『建築と椅子』 ●芸術と様式 ●バウハウスの思想	同上	32名	第10講義室
3	2016年9月17日(土) 14:00～17:00	第3回『北欧における近代椅子の伝統と産業 PART1』 ●デンマーク王立芸術アカデミーの系譜 ●デザイナーと職人、工房や組合、販社との関係性	同上	31名	第10講義室
4	2016年10月6日(木) 14:00～17:00	椅子学講座エクストラ 第1回『産業革命と生活工芸』	同上	12名	椅子ギャラリー
5	2016年10月20日(木) 14:00～17:00	椅子学講座エクストラ 第2回『プロダクト・デザインとその時代背景』	同上	12名	椅子ギャラリー
6	2016年11月12日(土) 14:00～17:00	第4回『北欧における近代椅子の伝統と産業 PART2』 ●フィンランド、スウェーデンの家具 ●ノルウェーの家具	同上	26名	第10講義室
7	2016年12月10日(土) 14:00～17:00	第5回『時代がもたらした椅子』 ●アメリカの椅子ー技術が生んだ彫刻的な形状ー	同上	23名	第10講義室
8	2016年12月17日(土) 14:00～17:00	第6回『現代的な椅子の始まり』 ●椅子の概念と解釈の広がり ●イタリアの椅子ーフォルムと実用性ー	同上	28名	第10講義室

平成29年度 「座って学ぶ 椅子学講座2」

	日時	講座名	出演者	来場者数	会場
1	2017年6月24日(土) 14:00～17:00	第1回『日本の椅子①』 ●戦前の様式	島崎 信(武蔵野美術大学名誉教授)	21名	椅子ギャラリー
2	2017年7月15日(土) 14:00～17:00	第2回『日本の椅子②』 ●多様な生産技術	同上	24名	椅子ギャラリー
3	2017年9月23日(土) 14:00～17:00	第3回『日本の椅子③』 ●広がる椅子のかたち	同上	17名	椅子ギャラリー
4	2017年11月11日(土) 14:00～17:00	第4回『折り畳み椅子の機構と可変性』	同上	20名	椅子ギャラリー

1 | 概要と目的

デザインに関連する情報をアーカイブする場合に「デザインに関する展覧会」はきわめて重要な事象として位置づけられるであろう。そこに出品された作品についてはもちろんのこと開催館、開催時期、関連イベント、構成内容等、展覧会の開催情報は、重要情報の集積体である。しかしながら、わが国において過去に開催された展覧会情報が集約されたデータベース等はまだ存在しない。そこで武蔵野美術大学ではプロダクト・デザイン中核拠点として、平成28年度よりこれまでに国内で開催された同領域に関する展覧会情報を収集している。そして平成29年度は、これらの集約情報をより実用的な情報群とすべく、検索機能を追加し、本事業ウェブサイト上に公開した。

収集対象をプロダクト・デザイン領域に限定したとはいえ、国内で過去に開催された展覧会情報を網羅的に収集することは容易いことではないので、今後も情報収集を継続していく必要があるが、この「プロダクト・デザイン関連展データベース」は、デザインに関する新たなアーカイブの一例ではないかと考える。

2 | 調査およびデータ作成方法

昨年同様、公益財団法人日本博物館協会が発行する「博物館研究」に掲載されている展覧会情報をもとに、インターネットで検索しヒットしたものを加えて、プロダクト・デザインに関連がある展覧会を抽出、Excelでリスト化を行った。抽出した情報は、展覧会名、開催場所、開催機関、主催者のほか、昨年度策定したプロダクト・デザイン定義案およびプロダクト・デザイン収集対象案から、当該展覧会が該当した条件を「カテゴリ」としてリストに記載した。特に今年度は、直近年度に開催された展覧会の情報を追加することに注力している。

昨年度はExcelリストをPDFに変換してウェブサイトにて開示したが、それだけでは展覧会情報を一定の条件で絞り込んで必要な情報にアクセスすることができない。そこで今年度は、ウェブサイト上で検索できる状態で公開することを試みた。

3 | データベースの機能とインターフェイス【図1】

登録されている展覧会の情報を、カテゴリ、開催期間、開催された都道府県(地方)から絞り込むための画面を先頭に表示している。カテゴリと都道府県はチェックボックスで、開催期間は年月日をプルダウンで入力して検索ボタンをクリックすると、絞り込まれた展覧会リストが検索結果一覧として表示される【図2】。

検索結果一覧のページでは、上部に絞り込んだ条件が、その下に抽出された展覧会リストが表示される。そこから1件を選択すると、展覧会詳細情報が表示されるようになっている【図3】。

4 | データベースの内容

(1) 展覧会データの総数

登録されている展覧会データは、671件である。(平成30年1月現在)

(2) カテゴリ別の展覧会データ

カテゴリ別の展覧会データ件数は、以下のとおりである。なお、ひとつの展覧会に対して複数のカテゴリ情報が付与されているため、合計はデータ総数と一致しない【図4】。

プロダクト 613 | グラフィック 66 | ファッション 83 | 建築 47 | 美術 8 | 陶磁器 121 | 金工 48 | 木工 41 | 漆工 26 | 竹工 14 | 染織 14 | ガラス 60 | 紙 14 | 家具 366 | 照明 124 | 食器/調理器具 273 | カトラリー 42 | 電化製品 50 | オーディオ機器 19 | 通信機器 4 | 掃除道具 7 | 玩具 30 | 置物/花瓶等/灰皿/雑貨 140 | 文具 40 | 時計 25 | 工具 11 | 自動車/バイク/自転車 21 | スポーツ用品 3 | 医療/介護 5 | 楽器 2 | インテリア 65 | 手紙等関係資料 29 | 関連写真・映像資料 72 | プロトタイプ 24 | デザイン画/図面 61 | 建築/模型・写真 61 | ポスター/広告/パッケージ 71 | テキスタイル 58 | 衣服/装飾品 75 | 書籍/雑誌/カタログ 34 | コミュニケーション 1 | 舞台 2 | 書 1 | 写真/映像 18 | 彫刻/立体作品 34 | 素描 10 | 原画 12 | リトグラフ4 | 版画 14 | 絵画 54 | 量産 585 | 近代以降 614 | クリエーター 352 | 製造社(者) 234 | フォルム 548 | 素材 49 | 技術 40 | 機能 37 | 利用・使用方法 16 | 経済性・流通性 93 | 後世への影響 248 | 影響を受けた 92 | デザイン思想 223 | 初号製品 2

(3) 年別の展覧会データ

登録されている展覧会データは、1964年から2018年のものまで、50年以上の期間にわたって、切れ目なく存在する。2000年以降急増しているが、これは実態としてプロダクト・デザイン関連の展覧会が増加しているだけでなく、それ以前のもはインターネット上に情報が存在しないものも多いと思われるため、この年別データがそのまま開催された展覧会の年度別推移を示しているとは断定できない。なお、調査した中で最も古い展覧会は、「第4回デザインギャラリー1953「あかり」 松屋銀座7F・デザインギャラリー1953(1964年8月14日-1964年9月2日)」である【図5】。

(4) 都道府県別の展覧会データ

プロダクト・デザイン関連展覧会の都道府県別データは、東京都が437件と極端に多く、大阪府23件、愛知県22件、神奈川県15件がそれに続く。一般的な美術展に比べて、都市部への集中度合いが高いことがわかる【図6】。

5 | 今後の展望

現在「カテゴリ」としている用語には、厳密には展覧会のカテゴリとは言えないものも当てはめられている。「テーブルウェア_ポット、カトラリー他」といった純粋な意味でのカテゴリと、「近代以降」といったプロダクト・デザイン展覧会にピックアップした条件のような概念を再整理し、閲覧者の利便性を高めたい。

また、将来的には、展覧会データベースに作品(資料)のデータベースや図録のデータベースが連携され、ある展覧会で展示された作品、その展覧会の図録がデータベース上で一元的に閲覧できるようにになれば、このデータベースの活用性は飛躍的に高まると思われる。

図1●展覧会データベース・トップ画面



図2●検索結果一覧

アーカイブ中核拠点形成モデル事業 HOME

PRODUCT プロダクトデザイン 活動内容 各年度活動報告書 展覧会データベース プロダクトデザインデータベース

展覧会データベース HOME > プロダクト部門 > 展覧会データベース

カテゴリ 木工

開催時期 2010年～

開催場所 茨城県, 栃木県, 群馬県, 埼玉県, 東京都, 神奈川県

検索結果 11件

展覧会名	開催場所	開催期間
フィンランド国立200周年記念 フィンランド・デザイン展	岩手県立美術館	2017年8月9日 - 2017年10月22日
AMBIENT 環境をデザインする生活の提案展	パナソニック 津田工場 2F	2017年7月8日 - 2017年10月10日
こども・おとも工房展 展覧会「ハッピーのおとも」	東京国立近代美術館工芸館	2017年7月4日 - 2017年9月30日
奈良五への建築探求「近所を語る材料とデザイン」	LIXIL デザインセンター	2017年6月8日 - 2017年8月26日
モダンリビングへの第一歩 建築工芸設計所の活動から	北沢野原地区立寄道沿道 展示場2	2017年5月22日 - 2017年8月10日
青山正徳的資料展 Life is Hand... Let's go shopping.	東京オペラシティアートギャラリー	2017年4月8日 - 2017年4月29日
日本デザインミュージアム 2016年創立10周年「伝統の未来 The Future of Japanese Tradition」	大塚駅前駅ビルイベントスペース	2016年9月19日 - 2016年11月13日
そばにいてる工房	高松市博物館	2016年9月8日 - 2016年10月25日
展覧会名 未定	東京国立近代美術館工芸館	2014年5月18日 - 2014年6月10日
ハウ・ハウ・スめ暮村	21cアトリエ 東京オペラシティ	2012年10月10日 - 2012年11月10日
展覧会名 アール・デコ時代の工房とデザイン	東京国立近代美術館工芸館	2010年4月27日 - 2010年6月27日

図3●展覧会詳細

アーカイブ中核拠点形成モデル事業 HOME

PRODUCT プロダクトデザイン 活動内容 各年度活動報告書 展覧会データベース プロダクトデザインデータベース

展覧会データベース HOME > プロダクト部門 > 展覧会データベース > 活動内容 > アール・デコ時代の工房とデザイン

展覧会名 アール・デコ時代の工房とデザイン

カテゴリ プロダクト、インテリア、家具、木工、漆工、陶器、ガラス、照明、装飾、書籍、文具、文具/筆記具、家具/寝具、時計、文具/備品、文具/消耗品、アクセサリー、フレーム、その他

開催場所 東京館

開催時期 東京国立近代美術館工芸館

開催期間 2010年4月27日 - 2010年6月27日

写真 東京国立近代美術館

検索TOPへ戻る

所蔵機関横断データベース(プロトタイプ)の構築と拡充

1 | システム概要

(1) テスト版構築の目的

本事業は、アーカイブの拠点を形成することを目指している。内外からその分野の拠点と認識されるような機関は、全国のどこにどのような資料があるかということ把握し、その情報を提供することが求められる。理想論としては、プロダクト・デザイン資料情報を全国規模で横断検索できるデータベースの構築が望ましい。

平成28年度はその構築を目指すためのモデルとなるデータベースとして、武蔵野美術大学美術館・図書館のプロダクト・デザイン資料情報の検索ができるテスト版システムを構築した。平成29年度は、全国規模の横断検索データベースの姿を描くことを目的として、平成28年度のテスト版システムに他の機関のプロダクト・デザイン資料データを投入し、複数機関のプロダクト・デザイン資料データベースを横断的に検索できるデータベースに進化、拡充させることとした。

(2) 複数機関横断検索に関する根本的な検討事項

多数の機関のデータを横断的に検索できるシステムを構築するには、二つのアプローチ方法がある。一つは、それぞれの機関のデータベースを文字通り横断検索するもので、対象機関のデータは1カ所に集約されない。その場合、公開されているそれぞれのデータベースに共通のプロトコル(約束事)が必要であり、別々のベンダーがそれぞれの仕様、データ項目体系で出来上がっているところに、共通プロトコルを追加実装しなければならないため、各機関のシステムに多少でも手を入れる必要が生じる。

もう一つの方法は、各機関から必要なデータを提供してもらい、あるひとつのデータベースに投入することで、多数の機関のデータを横断的に検索できるようにするものである。

前者は別々のシステムで公開されているデータを文字通り横断検索するものであり、後者は厳密には横断検索ではなく、統合型データベースとなる。各機関に対し、前者はシステム改修を必要とし、後者はデータ提供を必要とすることになる。各機関が別々のシステムを構築している中、前者で必要とされる統一的なシステム改修は技術的なハードルが高く、現実的ではない。一方、後者、統合型データベースの場合、各機関で追加、更新されたデータは、それが改めて提供され、中央のデータベースに投入される

までは反映されないため、その間は各機関と中央のデータベースは同期されない。したがって、統合型データベースは、理想的な横断検索システムとは言えないが、技術的なハードルが高くて本来のカタチが実現しないことに対する次善の策であり、この段階で実現可能な方法であった。

また、昨年度、各機関のプロダクト・デザイン資料の所蔵、データ管理、システム運用の状況に関する訪問調査において、プロダクト・デザイン資料情報を専用のデータベースシステムに登録、公開しているケースが少なく、歴史や民俗、美術工芸などに混ざって管理されていたり、システムではなくMicrosoft Excelなどで簡易的に管理されていたりするケースの方が多いということがわかってきた。つまり、本格的な横断検索システムを構築するための技術的ハードルに加えて、各機関の情報管理状況の違いというハードルも存在していたことになる。これも、我々がテスト版として統合型データベースを選択した理由である。

(3) 採用した製品と概要

プロダクト・デザイン資料所蔵機関横断データベースのテスト版には、昨年度に引き続き、早稲田システム開発社製I.B.MUSEUM SaaS を利用した。I.B.MUSEUM SaaS は、博物館収蔵品管理システムのクラウドサービスで、次のような特徴がある。

1. すでに運用されているクラウドサービスであるため、初期構築費用がかからない
2. データを登録し、インターネットで公開するまでを一貫してカバーしている
3. 分類や項目が自由に追加、変更できる

昨年度構築した武蔵野美術大学美術館・図書館のデータを対象としたテスト版に、今年度他機関のデータが加わる場合、昨年度に構築したシステムにはない項目が必要となったり、新たな分類を加えたりする必要が生じるのが容易に予想できたため、特に特徴3. については、テスト版データベースの拡張には必須の要素であった。

2 | 他機関からのデータの提供

(1) データ提供依頼と提供方法

●データ提供依頼先機関の選定

テスト版データベースの拡充にあたっては、特徴的なプロダクト・デザイン資料を所蔵している次の6機関を対象としてピックアップ

し、データ提供を依頼した。6機関はいずれも、テスト版データベースに採用している早稲田システム開発社製I.B.MUSEUM SaaSを使用しているため、データ統合の実作業も問題なく行えるということもあった。

●データ提供形式と方法

テスト版データベースシステムの仕様の都合上、テキストデータはMicrosoft Excelの形式と、画像はJPEG形式での提供を依頼した。データ提供機関・館が導入しているシステムには、Excel形式でデータをダウンロードする機能が搭載されており、どのデータを提供するかを選定すれば、その後の作業は比較的容易と思われるためである。また、当該機関が対象資料をデータベースシステムに登録しておらず、新たにデータを起こす場合でも、Excel形式にしておけば、テスト版データベースへの登録と同時に、当該機関のシステムへの登録も容易に行えるため、データ提供作業がその後の当該期間のデータ整備にもなる【図1】。

表1●データ提供機関・館

機関	データのジャンル	データ件数
九州産業大学美術館(全32件)	椅子	31
多治見市モザイクタイルミュージアム(全28件)	モザイクタイル見本帳	28
横浜市民ギャラリーあざみ野(全33件)	カメラ	33
岐阜県現代陶芸美術館(全51件)	テーブルウェア__ポット・カトラリー他	51
浜松市楽器博物館(全20件)	楽器	20
金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所(全221件)	テーブルウェア__ポット・カトラリー他	131
	調理器具	58
	家具__椅子、テーブル等	20
	室内雑貨__灰皿、花瓶等	12
合計		384

●データ提供機関・館の作業負担

データ提供を依頼する機関には、対象データを抽出したり、公開にあたって記載事項を再点検したりといった最小限の作業の負担は避けられない。したがって、データ項目などを絞こみ、当該機関のシステムからダウンロードしたままの状態加工することなく提供してもらうなど、余分な作業が発生しないように配慮した。

それでも、各データ提供機関・館の方々には、短期間で対象データを選定してシステムから抽出したり、データを点検したりといった作業負担をかけることになった。また、そもそも対象資料がデータ化されておらず、台帳も存在しない状態の中、現物にあたって情報を書き起こすところから取り組んでくださった機関もあった。このような協力について、改めて感謝の意を記したい。

(2) データ提供機関・館とその内容

今年度追加登録した他機関のデータ内容は、以下のとおりである【表1】。

3 | 公開ページの仕様

(1) 収録カテゴリ別データ件数

データベースには、検索のしやすさ、求める情報への「たどり着きやすさ」に配慮し、プロダクト・デザインのカテゴリを付与している。カテゴリごと、機関・館のデータ件数は以下のとおりである【表2】。

(2) カテゴリ別検索【図2】

カテゴリ別検索では、カテゴリ名称のテキストをプルダウンで選択するような一般的なデジタルアーカイブシステムの仕様ではなく、テスト版データベースに収録されている主なカテゴリを代表する資料のサムネイル画像を表示し、画像をクリックするとそのカテゴリの資料が一覧表示されるようなサイト作りを行った。これによ

り、プロダクト・デザインに関する専門的な知識がない人にもとつきやすいデータベースとし、直感的な操作で見たい情報にアクセスできるようになっている。現在は、図2のように12種類の画像が表示されている。そのうち一つをクリックすると、データベースの公開ページに遷移し、そのカテゴリで検索した結果が一覧表示される。図3は、図2の「テーブルウェア__ポット、カトラリー他」をクリックしたときに表示されるデータベース公開ページの画面である【図3】。

(3) 機関別検索【図4】

データベースをデータ提供機関・館ごとに検索する場合も、その機関・館の外観などの写真をクリックするだけで、その機関・館の提供データが一覧表示されるような仕様となっている【図5】。

表2●収録カテゴリ別データ件数

カテゴリ	武蔵野美術大学美術館・図書館	今年度データ提供機関・館						合計
		九州産業大学美術館	多治見市モザイクタイルミュージアム	横浜市民ギャラリーあざみ野	岐阜県現代陶芸美術館	浜松市楽器博物館	金沢美術工芸大学柳宗理記念デザイン研究所	
テーブルウェア__ポット、カトラリー他	257				51		131	439
調理器具	27						58	85
家具__椅子、テーブル等	394	31					20	445
照明	92						12	92
室内雑貨__灰皿、花瓶等	140							152
タイル			28					28
家電製品__オーディオ、シェーバー等	114							114
時計	69							69
カメラ	9			33				42
ステーションナリー__タイプライター等	118							118
玩具	402							402
楽器	6					20		26
その他	135							135
合計	1,763	31	28	33	51	20	221	2,147

ここでは「所蔵機関」ではなく「データ提供機関・館」という表現を用いている。このデータベースは所蔵資料を検索するのではなく、プロダクト・デザイン資料を検索することを目的としている。機関によっては、研究などの目的でアーカイブを構築して所蔵していない資料のデータを公開するケースもあり、そうした情報も当データベースで検索対象としていくことを想定しているため、「データ提供機関・館」という名称を用いた。

4 | 今後の展望

(1) データ提供機関・館の拡充

このデータベースは、プロダクト・デザインに携わる人が事例を紐解き、研究やデザイン制作の参考にできるものを目指している。したがって、検索対象となるデータ件数は多いほど良い。採用しているデータベースシステムは、データ件数や容量の制限はないこともあり、今後も継続的にデータの拡充を目指していくこととしたい。

(2) 制作者(デザイナー、メーカーなど)の名寄せと人物データの公開
各機関から提供されたデータには、制作者(デザイナー、メーカーなど)について、おそらく同じと思われるが呼称が微妙に異なるものなどがあつたが、作業時間の都合上、別人としてデータには登録せざるを得なかった。また、歴史あるメーカーなどで時代によって社名が変遷している場合、その時点の製造者を示すことを重視する場合はその時点の社名をデータに登録するが、データ上は別人(別会社)としての登録となる。その場合はその製造者による

プロダクトをデータ上で一望することが難しくなる。各機関ではそれぞれの方針に基づいて、制作者(デザイナー、メーカーなど)の情報を付与しているが、提供されたデータを統合するにあたり、当データベースにおいても統一した方針を定め、それに基づいてデータの見直し、名寄せを行う必要がある。

制作者(デザイナー、メーカーなど)の名寄せが完了すれば、閲覧者側のインターフェイスにおいて、制作者(デザイナー、メーカーなど)を一覧表示し、そこからワンクリックでその制作者(デザイナー、メーカーなど)による資料を検索することができるようになる。デザイナーごと、メーカーごとの検索機能が実現すれば、閲覧者にとってさらに利便性が高く、研究や調査に貢献するデータベースになるので、今後はそれを目指して、データの精緻化を推進したい。

(3) 利活用推進に向けての活動

当データベースの存在について、今後は関係機関への周知、PRを進め、プロダクト・デザイン関係者の利活用を推進したい。それによって当データベースの閲覧数が高まれば、データ提供機関・館にとっても、自機関のデータ流通が促進され、利用度の向上に寄与するというメリットが生まれる。それが新規にデータを提供するモチベーションにもなるため、ひいては当データベースのデータの拡充が進み、データが充実すると利用者にとってさらに価値が高いものとなって閲覧数が増加し、それがさらなるデータ提供機関・館の増加につながるという循環が生まれる。このように、関係機関への周知、PR活動は、利活用が高まりデータが充実するという循環を生み出すことを目指すものである。

図1●データ提供・アップロードのフロー

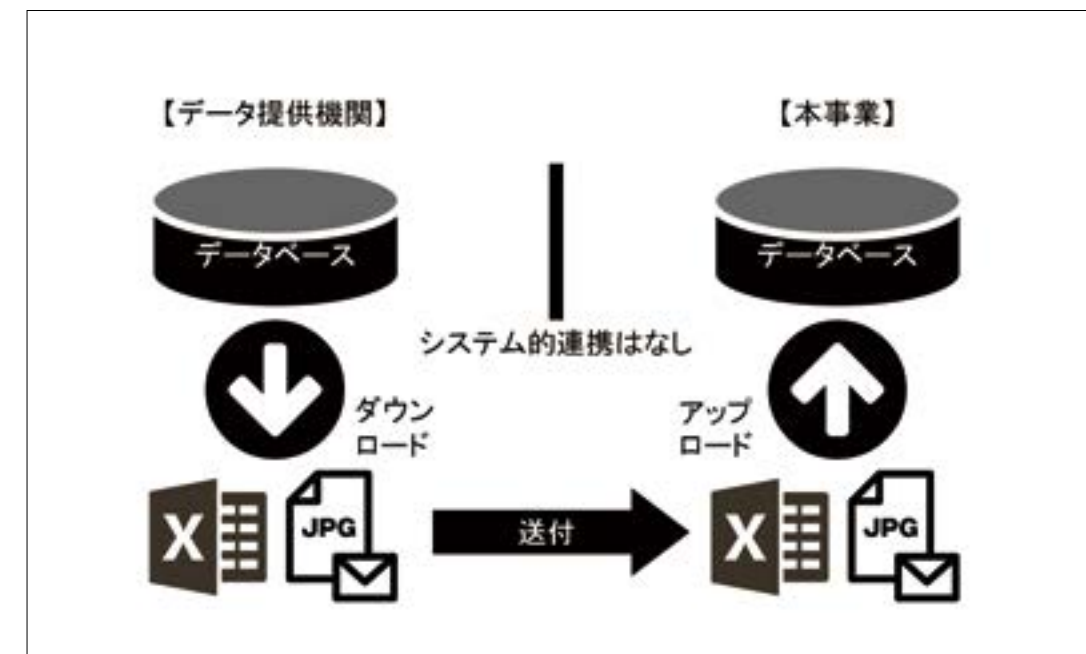


図2●カテゴリ別検索画面

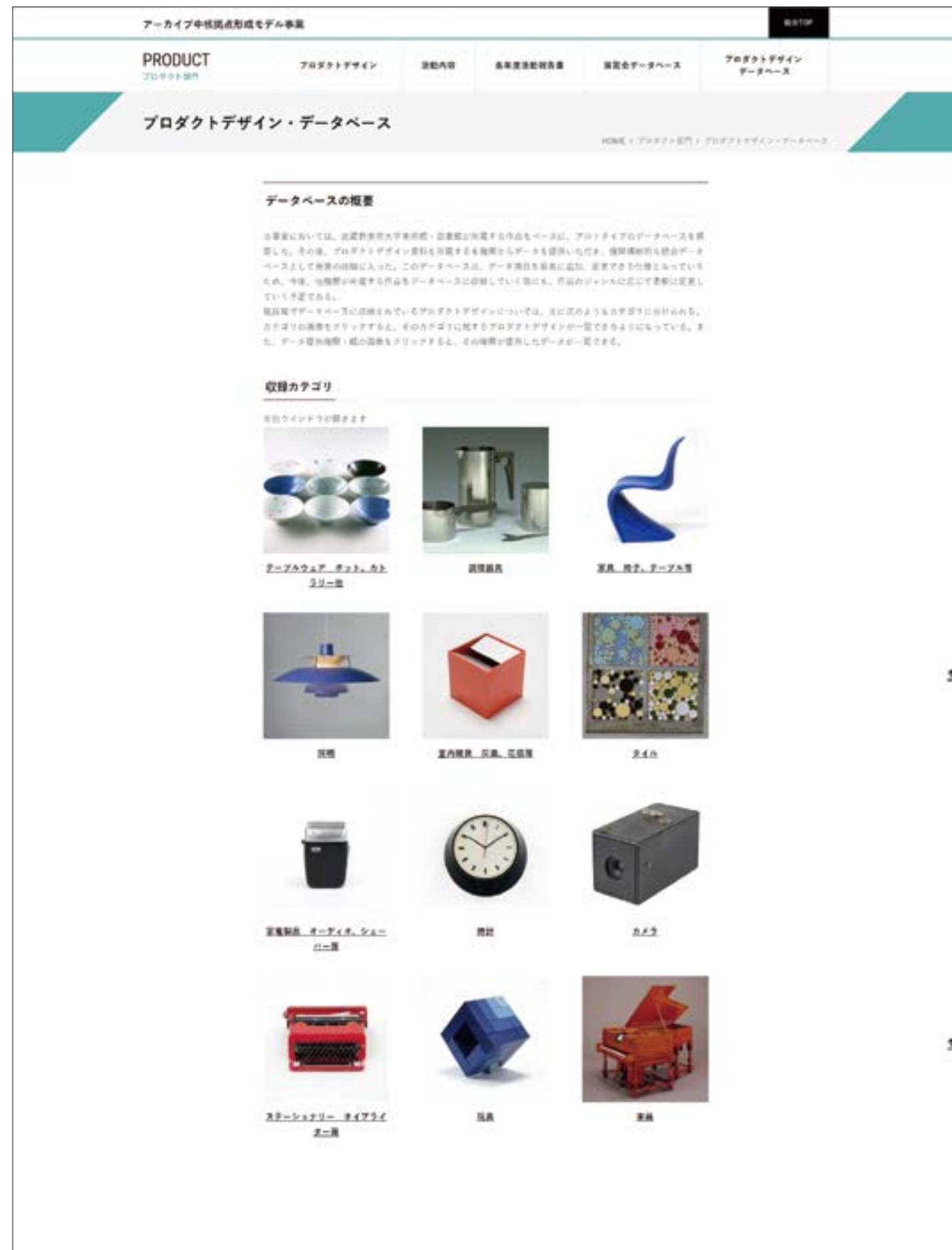


図3●「テーブルウェア_ポット、カトラリー他」の検索結果一覧

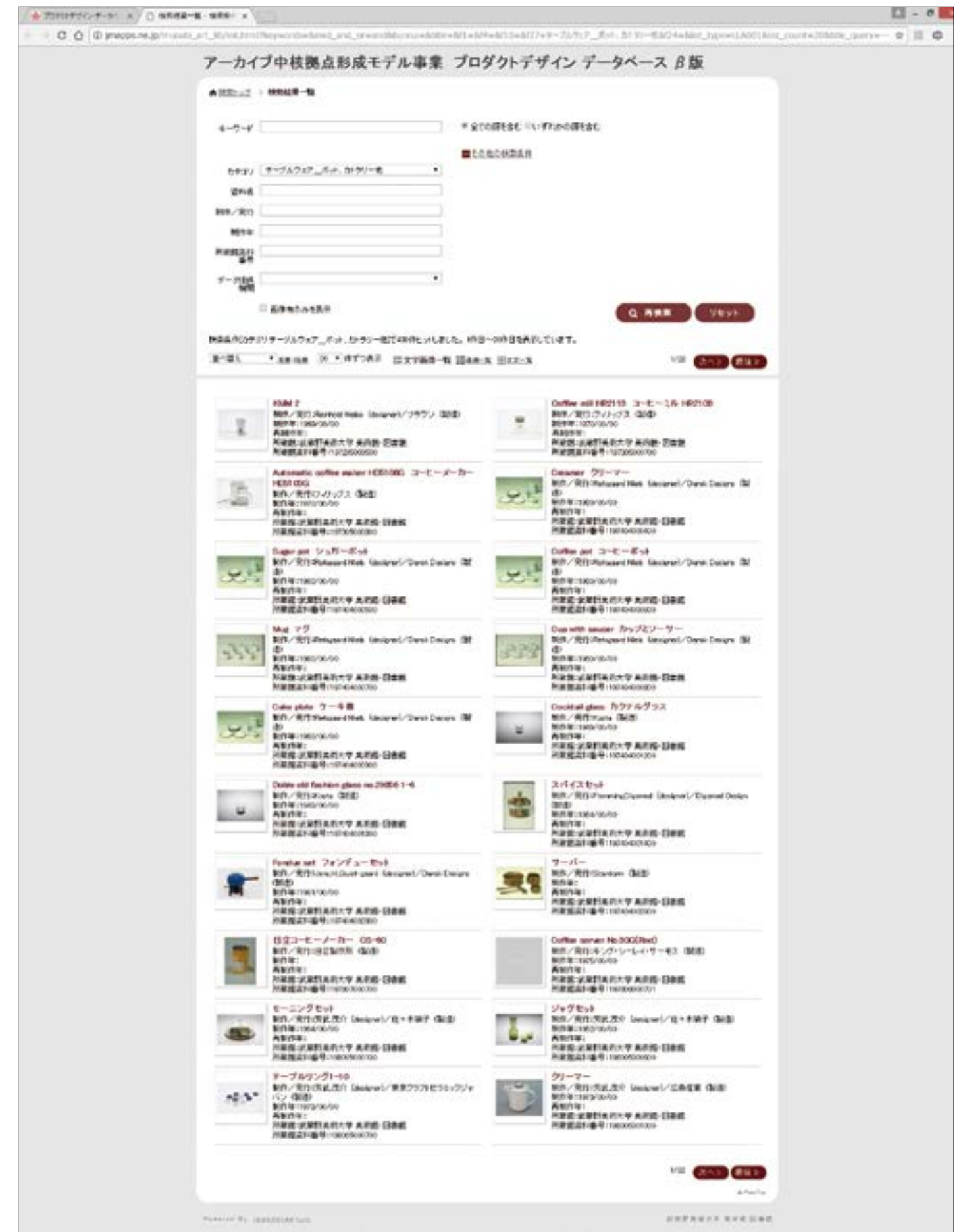
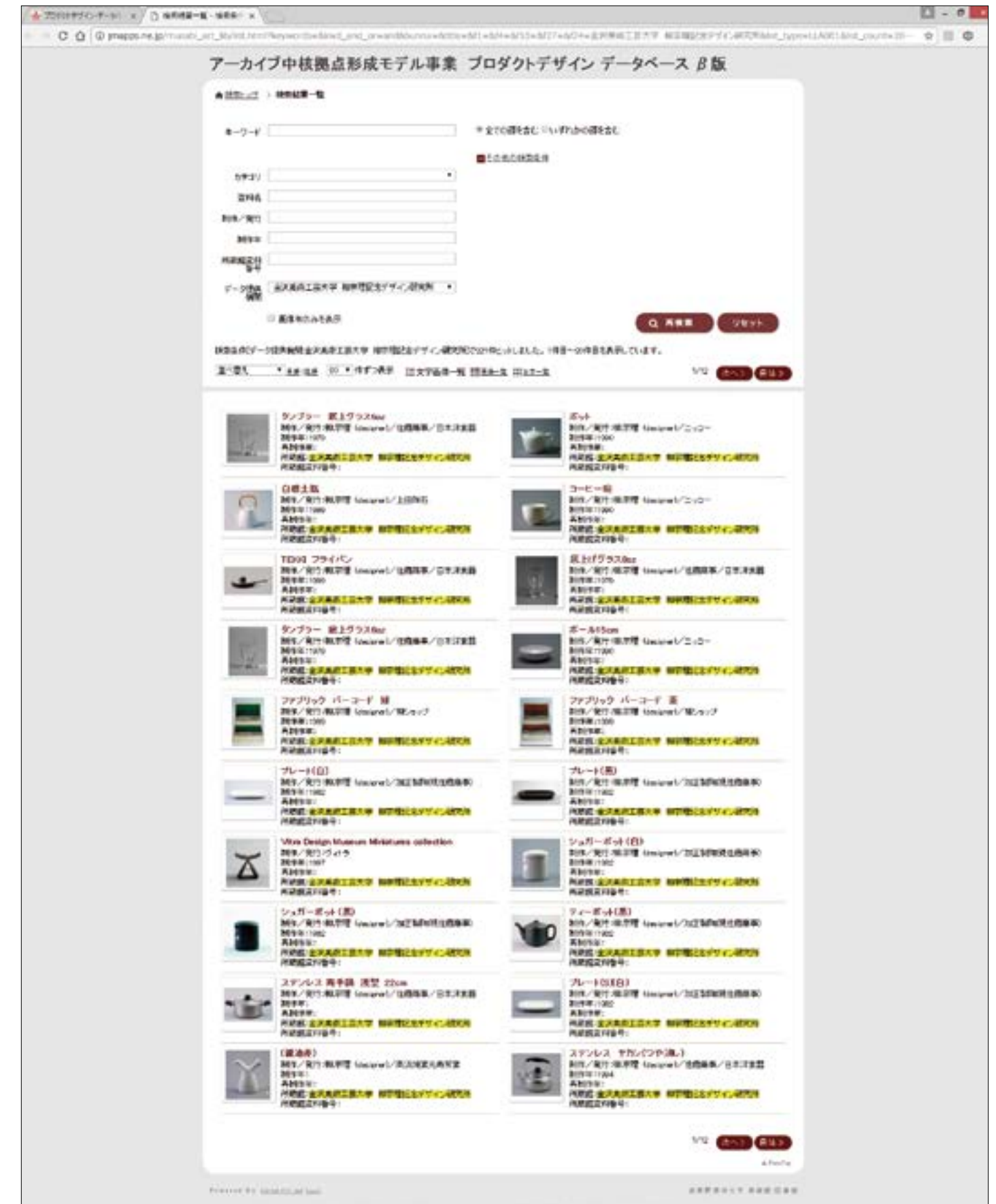


図4●データ提供機関・館からの検索画面



図5●データ提供機関・館「金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所」の一覧



アーカイブ中核拠点形成モデル事業 プロダクトデザイン データベース β版

検索トップ > 資料情報



1/4

[前へ](#) [拡大](#) [次へ](#)

Yチェア(アームチェア No.24) Y-Chair(Arm Chair No.24)

別名	Yチェア/アームチェア No.24/Y-Chair/Arm Chair No.24
制作/発行	カール・ハンセン (デンマーク) (製造)/ハンス ウェグナー (designer)
制作年	1950/00/00
制作場所	デンマーク
寸法(幅、横)	580.00
寸法(幅、横)単位	mm
寸法(高さ、縦)	730.00
寸法(高さ、縦)単位	mm
寸法(奥行き)	530.00
寸法(奥行き)単位	mm
材質	オーク材/紙紐編み/Oak/Papercord
解説	機械による大量生産低コスト化を目指しつつも高品質の維持を追求した椅子である。前脚は木工旋盤でつくられる回転体で後脚は実際は2次元カーブでできているが、軸を少しずらして組み立てることで非常に立体的なカーブに見える。一見非常に手間をかけている様に見えるが、要所要所に機械を用いて効率の良い生産が出来るようになっている。背あての部分はY字形でわずかなカーブだが精度をあげるために成形合板でできている。座はペーパーコードで編まれ座面奥にスリットを入れてそこで編むようになっている。とりわけ日本人には人気がある。
所蔵館	武蔵野美術大学 美術館・図書館
所蔵館整理番号	197002000300

4章

成果報告
Section4.Activity report

三校合同活動成果報告会

本事業 webサイト

三校合同成果報告会

—文化庁アーカイブ中核拠点形成モデル事業報告— シンポジウム 日本のデザイン資源を考える

本事業は、文化庁が多岐にわたるデザイン資料のなかから、グラフィック・デザイン分野を京都工芸繊維大学美術工芸資料館に、プロダクト・デザイン分野を武蔵野美術大学美術館・図書館に、ファッション・デザイン分野を文化学園大学和装文化研究所にそれぞれ拠点として委託し、各分野の現状調査、分析、課題の共有及び解決へのネットワークづくり等を目的として平成27年度より3年間にわたり実施してきた。

歴史的・文化的価値のある貴重な文化関係資料が散逸・消失することを危惧し、近年各種の文化関係資料のアーカイブを構築する動きが活発になってきている。デザイン資料もまたこの例に漏れないが、これらアーカイブ資料の保存・活用や情報共有につい

ての望ましい仕組みは、いまだ定まっているとは言えない。

本シンポジウムでは、本事業最終年度の締めくくりとして、各分野の中核拠点3機関が3年間の活動成果を報告するとともに、文化資料のアーカイブに造詣の深い有識者をゲストに迎え、我が国のデザイン資源の現状や課題について討議し、デザイン・アーカイブの今後について考える機会となった。

日時：平成30年1月20日（土）

シンポジウム 13:30～18:00

情報交換会 18:30～

会場：文化学園大学 A館20階 A201講堂

主催：文化庁委託事業 アーカイブ中核拠点形成モデル事業

【構成機関＝京都工芸繊維大学 | 文化学園大学 | 武蔵野美術大学】



プログラム

- 13:00-13:30 受付
- 13:30-13:35 文化庁あいさつ
林洋子(文化庁文化部 芸術文化調査官)
- 13:35-13:45 本事業について
並木誠士(京都工芸繊維大学 教授)

[第一部] 各中核拠点からの活動成果報告

- 13:45-15:30
グラフィック・デザイン分野 平芳幸浩(京都工芸繊維大学 准教授)
プロダクト・デザイン分野 田中正之(武蔵野美術大学 教授)
ファッション・デザイン分野 田中直人(文化学園大学 准教授)

[第二部] デザイン・アーカイブの現状と課題

- 15:50-17:50 ディスカッション、質疑応答
モデレーター：平芳幸浩(京都工芸繊維大学 准教授)
登壇者： 植木啓子(大阪新美術館建設準備室 主任学芸員)
中川麻子(大妻女子大学 准教授)
渡部葉子(慶應義塾大学 教授)
田中正之(武蔵野美術大学 教授)
近藤尚子(文化学園大学 教授)

- 17:50-18:00 全体のまとめ
並木誠士(京都工芸繊維大学 教授)

18:30- 情報交換会(事前申込制)

会場：文化学園大学 C館20階 スペース21



本事業Webサイト

本事業の事業報告や広報ツールとして、3分野合同のWebサイトを開設した。本事業の成果については、順次当Webサイトでも公開していく予定である。

現在当サイトでは、総合Topページにて本事業の概要の他、デザイン資料所蔵機関検索システムを公開している。

プロダクト・デザイン部門個別ページでは、成果報告としてプロダクト・デザインの定義案やプロダクト・デザイン資料の収集案の検討結果を公開している。また、3章において紹介した「プロダクトデザイン・データベース」、「展覧会データベース」へのアクセスが可能となっている。

WebサイトURL : <http://www.d-archive.jp/>

The screenshot displays the 'd-archive' website interface. At the top, the title 'アーカイブ中核拠点形成モデル事業' (Archive Core Hub Formation Model Project) is visible alongside the '文化庁' (Agency for Cultural Affairs) logo. A large image shows a gallery of various chairs on display. Below the image are two main navigation buttons: '本事業について' (About the Project) and 'デザイン資料所蔵機関' (Design Material Storage Institutions). The 'NEWS/TOPICS' section lists several updates with dates and brief descriptions, such as '2018.01.15 プロダクトデザイン・データベースを更新しました' (Updated Product Design Database) and '2017.12.28 プロダクトデザイン・データベースに「カメラ」のデータ23件を追加しました' (Added 23 data items for 'Camera' to the Product Design Database). At the bottom, there are three colored buttons for 'グラフィック部門' (Graphic Department), 'ファッション部門' (Fashion Department), and 'プロダクト部門' (Product Department). The footer includes logos for 'MUSEUM AND ARCHIVE', 'BFK', and 'MAM&L', along with copyright information for the project.

アーカイブ中核拠点形成モデル事業 総合TOP

PRODUCT プロダクト部門 プロダクトデザイン 活動内容 各年度活動報告書 展示会データベース プロダクトデザインデータベース

◀ ▶

● ○

プロダクトデザイン 活動内容 各年度活動報告書 展示会データベース プロダクトデザインデータベース

G
グラフィック部門
 F
ファッション部門
 P
プロダクト部門
▶

※サイトに掲載されているすべての写真、図解等に使用する権利は、アーカイブ中核拠点形成モデル事業の担当者より許可された関係者その他の権利者に帰属します。無断転載はご遠慮ください。
 作品画像の著作権等への権利侵害につきましては、各当事者にお問い合わせください。本サイトからの複製コピー、ダウンロード等はご遠慮しておりますので予めご了承ください。

Copyright © Core Archive Center Creation Model Project All Rights Reserved.

アーカイブ中核拠点形成モデル事業 総合TOP

PRODUCT プロダクト部門 プロダクトデザイン 活動内容 各年度活動報告書 展示会データベース プロダクトデザインデータベース

活動内容 HOME ▶ プロダクト部門 ▶ 活動内容

ネットワークの構築
 Creation of a Network

- プロダクト・デザイン資料所蔵アンケート
Results of a Questionnaire of Product Design Material Archives
- 所蔵機関訪問調査
On-Site Surveys to Institutions with Materials

アーカイブ手法の検討
 Studying Archiving Methods

- プロダクト・デザイン研究会
Product Design Study Group
- 座って学ぶ椅子学講座
Armchair Lecture
- プロダクト・デザイン関連展リスト作成
Creation of Lists of Product Design-Related Exhibitions

データベースの管理、運用、利活用
 The maintenance, operation, and utilization of databases

ネットワークの構築 2017.10.23

プロダクト・デザイン資料所蔵アンケート

連携機関との連携 2017.10.19

三校連絡会議

データベースの管理、運用、利活用 2017.10.19

プロダクト・デザイン資料所蔵機関検索DBテスト版構築

データベースの管理、運用、利活用 2017.10.19

プロダクト・デザイン資料所蔵機関との意見交換

アーカイブ手法の検討 2017.10.19

プロダクト・デザイン研究会

アーカイブ手法の検討 2017.10.19

座って学ぶ椅子学講座

2017.10.23

2017.10.19

2017.10.19

2017.10.19

2017.10.19

2017.10.19

【報告書】

平成29年度
文化庁アーカイブ中核拠点形成モデル事業
プロダクト・デザイン分野 報告書

編集：
武蔵野美術大学美術館・図書館
株式会社ミュージアムメディア研究所

デザイン：
馬面俊之

印刷：
株式会社アトミ

発行：
武蔵野美術大学美術館・図書館
〒187-8505
東京都小平市小川町1-736
042-342-6003
<http://d-archive.jp>

発行日：
2018年3月30日

本報告書の一部または全てを複写複製することを禁じます。
©Musashino Art University Museum & Library 2018

【添付資料】

デザインミュージアム プロダクト・デザイン
コレクションプラン

監修：
島崎 信(武蔵野美術大学名誉教授)

編集／デザイン：
笠原嘉人(笠原嘉人アトリエ)

編集協力：
武蔵野美術大学美術館・図書館

印刷：
株式会社アトミ

発行：
武蔵野美術大学美術館・図書館
〒187-8505
東京都小平市小川町1-736
042-342-6003
<http://d-archive.jp>

発行日：
2018年3月30日

本資料の一部または全てを複写複製することを禁じます。
©Musashino Art University Museum & Library 2018